《美術史料紹介》

東寺観智院金剛蔵本（建武二年写）『諸説不同記』巻第八（下）
解題・翻刻・校註・影印

津田徹英、石井千紘、蔀　政人

『諸説不同記』は法三宮真寂（八八六～九二七）の撰述になる。それは空海が請来した「現圖」胎蔵曼荼羅にあらわれた諸尊の尊容の特徴を一尊ずつ簡潔な筆致で記述したものである。本書が「現圖」胎蔵曼荼羅そのものの研究を行う上での現存最古の基本文献であることはいうまでもない。

本書の活字本には、東寺観智院金剛蔵に伝来した建武二年（一三三五）の書写本十帖（以下、建武本）を底本にして昭和八年（一九三三）に翻刻したものが『大正新脩大蔵経』図像第一巻に収録されている（以下、大正蔵本）。ところが、この大正蔵本は、大正二年（一九一三）に狩野享吉氏旧蔵の近世写本（現、東北大学図書館狩野文庫本）を底本にして活字化をみた『大日本仏教全書』本（以下、仏全本）をもって対校し、適宜、字句を改めている。しかしながら仏全本は初稿本系に属し、底本となった建武本は真寂自らが初稿本に加筆・改訂を施して成った再治本であったため、仏全本で建武本を改訂した結果、再治本系の建武本とも、初稿本系の仏全本とも随所において文言を違えることになってしまった。しかも、校訂の過程で、どの字句が改められたかについて全く言及が無いため、『諸説不同記』を用いて「現圖」胎蔵曼荼羅の研究を進めてゆくためには、改めて建武本を出来る限り原文に忠実に活字化するとともに、大正蔵本との文字・字句等の異同を明確にしておく必要がある。しかしながら、建武本は全十帖からなり、一度にすべての確認作業を完了することは不可能である。自ずと長期的な展望をもって地道に、かつ、着実に進めて行くことが望ましいことは言を俟たない。

さて、今回は建武本の巻第八（一帖）の後半（二十二丁裏＝「難陀龍王」以下）を翻刻し、あわせて校註・影印を付す。翻刻に際しては建武本の原文に忠実な翻刻を行い、校註において大正蔵本との字句の相違に及ぶとともに、次の二本とも文字・字句の比較検討を行い、異なる場合はその旨を校註に掲げることとした。その二本とは初稿本系の仏全本と、建武本と同じ再治本系の写本で、建武本より

書写年代が遡る（平安末期ないし鎌倉初期の書写とみられる）東寺観智院金剛蔵に伝来した旧「長福寺」架蔵の零本である（以下、長福寺本）。

以下に巻第八の後半を翻刻し、校註を付して解読してゆく作業の過程で気が付いたことを「校訂上の問題」「引用の経典儀軌と先師口決類」「尊容記述の問題」に分けて、それぞれ備忘録風に書き留めておくことにしたい。

校訂上の問題

建武本の巻第八後半には等閑視できない大きな脱文がある。それは「死鬼衆」から「鬼女衆」、「鬼衆」に及んでのものであり、翻刻文（後掲）の行番号でこれを示しておくと、443から477までの三十五行分（文字数にして六五四文字）である。これは見開き二面分に相当しており、建武本の筆者は見写に際して、丁替わりのところで見開き二面分を飛ばしたことに気がつかないまま書写を進めてしまったようである。ただし、大正蔵本における翻刻に際しては、この脱文箇所は補われている。かねて指摘する通り大正蔵本の翻刻に際して初稿本系の仏全本をもって校訂がなされていた。しかし仏全本における当該箇所の文字量は三六九文字にすぎない。文字量から判断して初稿本系の仏全本をもって脱落箇所を補い、翻刻がなされたとは考え難い。今回の翻刻ではこの脱落分を同じ再治本系の長福寺本をもって補ったが、その長福寺本には文章に混乱が認められ[註1]、むしろ脱落箇所の補訂は大正蔵本の翻刻の方が適切なように思われた。大正蔵本の翻刻にあたって明示こそなされてはいないが、同じ再治本系の別の善本をもって脱落箇所が補われたようである。ただし、それにしても奇妙なことではあるが、この脱落箇所からさほど離れていない箇所において、建武本には一行分に相当する脱文（翻刻行番号516）が認められるのであるが、上述の当該善本を用いて文を補うことなく、建武本通りの翻刻に留っている。それは「荼吉尼衆」の項における鬼形三体の記述に関わる。建武本の現状では右方（向かって左）分の記述がどこから始まっているのか判然としない。これを再治本系の長福寺本および初稿本系の仏全本に依拠して当該箇所を確認してみるとき、「山圖被胄」に続く「右手竪拳」（翻刻行番号515の最後）と「竪肘」（翻刻行番号517の冒頭）の間に「向内、左手持刀、一在内、周身赤色、赤髪、或圖肉色、右手」の一文（＝二一文字）を欠いていたことになる。この一文を当該箇所に組み込んでみると、「右手竪拳」は「山圖」にかかわる記述の一部であり、「竪肘」以下は「現圖」の右手にかかわる記述であったということが明確になる。

ちなみに、この「荼吉尼衆」の項の文末には『義釈』巻第十二・秘密漫荼羅品第十一之餘を出典とする条文の引用が認められる。そこには六箇所に及ぶ印図が書き込まれているが（後掲）、大正蔵本の翻刻では建武本のそれらに拠らず、すべて仏全本にもとづき、それらを謄写して用いたことは、印図の比較から一目瞭然である（後掲参照）。なお、建武本では六箇所の印図のうち「輪羅印」のみ、描写は随所に付された「三摩耶形」の線描に近く、おそらく、これのみ「三摩耶形」を描いたひとによって描かれていたようである。

一方、残り五箇所の印図は建武本を書写した筆者が手ずから描いたようであり、「輪羅印」のような繊細な描写は認め難い。[註2]

引用の経典儀軌と先師口決類

さて、建武本の上述の脱文を確認し、ひとまず長福寺本によってその欠を補ったうえで、巻第八後半における引用典籍・口決類について以下に俯瞰しておく。詳細については後掲の「巻第八（後半）引用典籍・口決類一覧」に譲るが、概略を述べておくと次の通りである。

巻第八後半が引用する経典類は『大日経（大毘盧遮那成仏神変加持経）』、『義釈（毘盧遮那成仏神変加持経義釈）』、『三蔵軌（広大儀軌）』、『玄法寺軌』であり、大日経系に限られている。これらのうち引用の中心をなす『義釈』について、真寂はそれを引用する際、円珍将来の十巻本『義釈』と空海請来の二十巻本『疏（大日経疏）』の双方から適宜引用していたことを既に指摘しているが、[註3]巻第八の後半にあってもそのことが確認できる箇所は多くはないが、傾向は窺える。[註4]

このほか、尊位および尊名にかかわって「所傳圖」と「坐位圖」に言及がある。前者は『義釈』巻第四に収載される「阿闍梨所傳漫荼羅圖位」のことであり、十一か所において言及がある（後掲「巻第八（後半）引用典籍・口決類一覧」参照）。後者は「死鬼衆」のなかに一か所あらわれるもので、これまで指摘してきたように『秘蔵記』の「胎蔵曼荼羅尊位」と密接な関係が認められるようである。[註5]

一方、先師口決類として、書名は明らかにできないが、丹波国水尾玄静の撰述書からの引用とみられるものが[註6]「荼吉尼衆」の項に一か所、「禅門云」として引用をみる（翻刻行番号511）。このほか「死鬼衆」の項には、直接の引用ではないが、「五大院は此の次に別に焔魔妃を立て、一鬼は中に在り（原文読み下し）」と記されており（翻刻行番号444）、それは安然（八四一頃～九一五頃）撰述の『胎蔵界大法対授記』の記述[註7]を踏まえるようである。

尊容記述の問題

以下に尊容の記述に関する問題を、本文の解釈にかかわっての問題と、御室版との図様の小異に分けて及んでおきたい。

（1）本文解釈の問題

本文を読み解く上で一顧しておきたいのは「成就仙衆」四尊の記述にある。初稿本系の仏全本は「現圖」を中心に四尊の記述が組み立てられており単純明快である。これに対して再治本系の建武本、長福寺本では、初稿本の「現圖」の記述をベースにしながら、そこに「或圖」の記述を適宜組み込んでいる。留意したいのは最初の二尊すなわち「在内」から「在外」に至る記述にある。長福寺本ではその記述に混乱があり（翻刻行番号566～569の校註参照）、建武本の記述にしたがうべきであろう。その「在内」の「或圖」の記述について、建武本では「或圖屈臂仰掌、屈名中小頭、中間夾嚢繋肘上、従上出外其嚢非皮」と記している。それは左手についての記述である

が、文中の「屈名中小頭」は、長福寺本では「屈中名小頭」といささか指の記載の順番を異にする。続く文中の「夾囊」は、長福寺本が表記する「夾囊口」の方が記述として適切であるように思われるが、この「夾囊口」の語句は直後の「繫肘上、従上出外其囊非皮」と繋がって一文をなすと解するならば、そのまま「或圖」の記述となるが、「夾」で分節するとみるならば、「囊口繫肘上、従上出外其囊非皮」は「現圖」の記述と考えることも不可能ではない。かつ、御室版（挿図1）に目を転じるとき、当該文に示されるように囊の口部が肘に懸かり、囊の口が毛皮には見えないことにも適うようでもある。とすればそれは「現圖」の記述とみることもできる。しかし上述のごとく当該文は再治に際して加えられたものであり、それは専ら「或圖」についての記述であった。そのことを思えば「或圖」の記述とみることも不可能ではない。いずれを採るか悩ましいところであるが、ひとまずここでは「囊口」以下を「現圖」のこと解しておくことにした。

挿図1 成就仙衆のうち
（御室版 部分、以下同）

このほか、真寂は「鬼衆」六尊とは別に「鬼衆」の項目を設定し、「現圖」は上述の鬼衆の左と記す（翻刻行番号485～486）。ただし、その「現圖」の象形については何ら言及がない。ちなみに御室版では該当する図像が存在しない。加えて文中において「坐位圖」は「無後鬼衆」と記す。かの「坐位圖」は『秘蔵記』の後に付される「胎蔵曼荼羅尊位」と密接な関係にあることが指摘されているが（既述）、この「胎蔵曼荼羅尊位」では「鬼衆」六尊に相当するものを「太山府君部落衆」に包摂するようであり[註8]、とすれば他に該当する「鬼衆」がないことを「坐位圖無後鬼衆」と言ったのであろうか。難解な箇所で正直なところその判断がつかない。

（2）御室版との尊容の小異について

かねてより真寂が熟覧に及び、各尊の像容を書き留めた『諸説不同記』の「現圖」各尊の記述のなかにあって、同じく「現圖」の第二転写本とされる高尾曼荼羅に現れた諸尊を白描で写し取ったものの系譜をひく御室版との個々の尊容の比較・検討のなかで、そこに少なからず小異が存することに注意を喚起してきた。この巻第八の後半にあっても真寂が実見に及んだ「現圖」における尊容記述と、御室版にあらわれた尊容との間に認め得る小異は、いずれも微妙なものではあるが、次の九尊に認めることができる。

① 闇黒天女

真寂は「現圖」の右手を「指端向外少屈」と記すが（翻刻行番号412）、御室版（挿図2）でこれを眺めるとき、仰掌する指先（指端）を「少屈」とする点は認めてよいが、これを「向外」とすることにはいささか戸惑いを覚える。加えて文中に「无冠繒」とあることは明らかに「現圖」に関わる記述とみなし得るが、御室版では右肩に懸る帛布が認められ、それは冠繒と認めざるを得ない。明かに真寂の記述と異るとみるべきであろう。

② 岱山府君

建武本はもとより、同じ再治本系の長福寺本、さらには初稿本系の仏全本においても、「現圖」の筆を執る右手の形状について「垂下舒屈頭指、屈餘指」と表記している（翻刻行番号422）。その文中にあって「頭指」を「舒屈」と表記するが、これでは意味が通らない。ここで御室版（挿図3）を参考するならば、その右手は頭指（第二指）を軽く伸ばしており、「舒屈」の「屈」の一字は衍字と判断すべきように思われる。

③ 鬼衆女の「一鬼在外」

この「鬼衆女」と次の「鬼衆」については既に述べたように建武本が本文を脱落しているため、建武本と同じ再治本系の長福寺本を用いて解読を進めることとなる。すなわち真寂はその左手について「拳持人臂當心」（翻刻行番号453～454）と記す。ただし御室版でこれを確認するとき（挿図4）、左手の頭指（第二指）を伸ばしており、そのことについての言及がないばかりか、手の位置についても腹前付近にあり、記述に「當心」とあることといささかそぐわない。

④ 鬼衆の「一鬼在内」「一鬼在中東」「一鬼在外」

真寂の記述にしたがえば一群の「鬼衆」のうち、向かって左端の鬼形について両手をともに「竪拳」と記述するが（翻刻行番号465、466）、御室版で確認してみるとき（挿図5）、右手は五指を開いて掌を立てており、「竪拳」とはみなし難い。

そして、その左（向かって右）隣の鬼形のうち奥（上方）のそれについて、長福寺本は「開張口」と記している（翻刻行番号471～472）。一方、大正蔵本は仏全本の記述同様に「張口」と翻刻している。ここで問題としなければならないのは長福寺本に見える「開」の一字を大正蔵本が脱落させることの是非にある。御室版で眺めてみるとき、口は一文字に結んでおり、その点では大正蔵本の翻刻は適切であったということになる。しかし、仮に長福寺本の記述の通りであったとするならば、当該尊は開口であったということになり、閉口する御室版との間で小異が生じることになる。いずれを是とするかの判断が難しい。

このほか向かって右端の鬼形について、真寂は右手で「人臂」を持ち、これを食らうとあることに続いて「其血滴下」と記すが（翻刻行番号476）、御室版においては血の滴る様子までを確認することはできない。

挿図 4 鬼衆女のうち「一鬼[在外]」

挿図 3 岱山府君

挿図 2 闇黒天女

挿図 6 摩尼阿修羅の「一使者[在右]」

挿図 5 鬼衆

挿図 8 -(2) 同左手

挿図 8 -(1) 阿修羅衆の「一使者[在左]」

挿図 7 -(2) 同左手

挿図 7 -(1) 阿修羅衆の「一使者[在右]」

⑤ 摩尼阿修羅の「一使者在右」

真寂は「摩尼阿修羅」に随従する「一使者在右」（向かって左の使者）の着衣について「被襵襠袈裟」と記している（翻刻行番号585）。このうち「袈裟」は条帛のことを指すが、御室版で当該尊を眺めるとき（挿図6）、条帛の着用は確認できても襵襠衣の着用は確認できない。真寂が見た「現圖」と御室版との相違として認知すべきであろう。

⑥ 阿修羅衆の「一使者在右」および「一使者在左」

真寂は右（向かって左）使者の五指を開いて仰掌する左手の指先について「掌少屈頭指當心」と記しているが（翻刻行番号599）、御室版でこれを確認してみると（挿図7）、少屈とするのは頭指（第二指）ではなく、中指（第三指）であったようにみなされる。

一方、左（向かって右）使者の左手について真寂は「仰掌、屈名小指當斉下」と記すが（翻刻行番号600～601）、御室版に目を転じてみると（挿図8）、その左手先は確かに記述通り無名指（第四指）と小指（第五指）を屈しているようであるが、あわせて頭指（第二指）を屈して大指（第一指）と捻じ、中指（第三指）のみを軽く伸ばしているようでもあり、真寂が認知した記述との小異を認めざるを得ない。

挿図9 鳩盤荼女

挿図10「八坂吉祥園院本」の墨書

挿図11 奥書識語

⑦　鳩盤荼女

真寂の記述にしたがえば左右手ともに「持銅鈸子」とし、その「鈸子」には「有緒」を明記する（翻刻行番号625）。しかし、御室版（挿図9）では左右の手に持つ「鈸子」には下げ「緒」（帛布）もしくは、その三摩耶形にみるような両鈸子を連結した「緒」の存在は認め難い。これは明らかに真寂の記述と御室版の尊容における小異と認知すべきであろう。

付記　奥書識語等

建武本では尾題の傍らに別筆にて①「八坂吉祥園院本」を明記するとともに（挿図10）、奥書に建武本の底本にあったと考えられる②「仁安二年六月十六日於菩提院書了　行宴」の識語と、あわせて③「于時建武二年乙亥六月十一日　於神照寺本堂書了　幸秀」の識語を伝える（挿図11）。これらのうち、③の識語に見える「神照寺」が近江長浜の神照寺に相当すること、ならびに、その後、本書（建武本）が伝えられた①の「八坂吉祥園院」が京都東山清水坂界隈にあったことについては松原智美氏による指摘がある[註9]、また、その底本となった②について「行宴」（一一三〇～一二〇〇）が仁和寺を活動圏とする真言僧であり、書写の場となった「菩提院」も仁和寺内にあったことについてはかつて指摘した通りである[註10]。

（津田徹英　記）

註

（1）例えば「鬼女衆」の項の末文（翻刻行番号454～455）にみえる「有四鬼一鬼在内」は、大正蔵本において示されるように本来は「鬼衆」の項の「鬼衆女之左」と「青髪向上」の文（翻刻行番号465）の間に入るべきものと思われる。

（2）このほか尊容にかかわる脱字として、「迦樓羅女」の「現圖」の坐法について、建武本では「左脚右交坐」と記すが（翻刻行番号613）、初稿本系の仏全本、再治本の長福寺本ともに「左脚押右交坐」とあることを思うと、建武本は「押」の一文字を脱落するものとみなされる。ちなみに大正蔵本ではまさしくそのように判断して翻刻がなされている。また、衍字には「摩尼阿修羅」の左使者の左手持物について建武本、長福寺本ともに「拳持杖、上金半月右」と記されるが（翻刻行番号588）、大正蔵本の翻刻に際しては初稿本系の仏全本の記載を勘案して、この「右」の文字を削除している。このほか、「岱山府君」の右手頭指（第二指）の記述における衍字については本文中で述べる通りである。

（3）津田徹英、大澤信、栗原麻未、加藤詩乃、塩谷尚子、高橋由弥、中川典子「東寺観智院金剛蔵本（建武二年写）『諸説不同記』巻第五（上）翻刻・校註・影印」『史友』四四号、青山学院大学史学会、二〇一二年。

（4）『義釈』からの引用は十八箇所に及ぶが（後掲「巻第八（後半）引用典籍・口決類一覧」参照）、引用の語彙にあって円珍請来本系の十巻『義釈』の文言（『続天台宗全書』の表記にしたがえば㋑本に相当する）の特徴を備えることが確認できる箇所については本翻刻の校註382、500を参照されたい。一方、引用の語彙にあって空海請来本系の二十巻『疏』の文言（『続天台宗全書』の表記にしたがえば㋥本に相当する）の特徴を備えることが確認できる箇所については本翻刻の校註432、433を参照されたい。

（5）松原智美「『秘蔵記』の胎蔵曼荼羅尊位」『奈良美術研究』四号、早稲田大学奈良美術研究所、二〇〇六年。

（6）津田徹英、浅沼桂子、高橋かおり、東條由紀、原浩史「東寺観智院金剛

蔵本（建武二年写）『諸説不同記』巻第三・蓮華部院（上）翻刻・校註・影印」『史友』三八号、青山学院大学史学会、二〇〇六年。
（7）『大正新脩大蔵経』75―八五ｂ、一〇九ｃ。
（8）『大正新脩大蔵経』図像1―一四ｂ。
（9）松原智美「『諸説不同記』の二系統―東寺観智院金剛蔵本（建武二年写）と『大日本仏教全書』―」『奈良美術研究』五号、早稲田大学奈良美術研究所、二〇〇七年。
（10）津田徹英、浅沼桂子、佐竹行彦、高橋かおり、東條由紀、林彩子、原浩史、山中麻梨子「東寺観智院金剛蔵本（建武二年写）『諸説不同記』解題ならびに巻第三・遍知院翻刻・校註・影印」『史友』三七号、青山学院大学史学会、二〇〇五年。

〔付記〕本稿は平成29年度青山学院大学大学院文学研究科比較芸術学専攻の履修科目「日本・東洋美術史（3）演習Ⅰ・Ⅱ」を受講した本学大学院生とともに輪読した成果である。本書の原本閲覧時には東寺当局のご高配を得た。ここに記して改めまして謝意をあらわす次第であります。

胎蔵曼荼羅　最外院（巻第八後半 収載分）諸尊異同一覧

		現図	或図	山図
難陀龍王	体　勢	面向左方、		
	右　手	向身持刀、	竪拳持之(＝刀)、	
	左　手	掌叉腰、	拳叉腰、	索、
	装身具	无冠繒、		
	光　背	首有七龍光、		
烏波龍王	体　勢	面※1向右方、		
	右　手	向内執刀、		叉腰、
	左　手	竪掌向身當妳、	仰掌屈四指、掌持含蓮、	刀、
	装身具	无冠繒、		
	光　背	有七龍光、		
阿脩羅王衆 (在門内右)	体　勢	面向左方、		
	右　手	向内、持刀、當於妳上	棒、	
	左　手	拳申、小叉腰、	仰拳、叉之(＝腰)、	
	装身具	无冠繒、		
	坐　法	竪右膝坐、		
同上 (在門内左)	体　勢	面向右方、		
	右　手	向内持刀、當持妳上、		拳叉腰、
	左　手	仰拳當於斉下、		刀、
	装身具			无冠繒※2
南門	両　柱	上置緑寶、	青寶、	
	横　木	中央有黄色獣、含其横木上下齒現、左右邊有手従横木下出前、獣頭上蓮上青寶有焔、有瓔珞従獣口下垂※3	(獣)頭上半月々々上緑寶、	
焔摩羅王	身　相		赤黒色、	
	体　勢	面向右方、	正向、	
	右　手	側仰掌、指頭向右少竪、	仰掌、指頭向右、屈頭指、	
	左　手	向内、執檀荼杖、頭有金半月形、上有一人頭髪髻、		
	坐　法	乗※4臥白水牛、垂左脚、	乗※4青水牛、同(＝有絡結角根)、	有絡結角根、
	台　座	其牛※5在毯座上、		
黒闇天女	体　勢	面向左方、仰視焔摩、		
	右　手	仰掌、指端向外少屈、	竪掌如施无畏、	仰掌當心、持髑髏、
	左　手	拳執檀拏杖、頭有半月形、上有人頭、童子面状、	人頭有髪髻、	持棒、上置髑髏、
	装身具	无冠繒、		
岱山府君	体　勢	面向右、伏面下視、		
	右　手	垂下舒屈頭指※6屈餘指執筆、膝前開※7布畫巻、作點書勢、	屈諸指、把敷紙、	前置硯、
	左　手	垂下舒、覆掌當腰側、持檀拏杖、端有金環々中有人面、	當腰側、向内持物、	
一鬼 (岱山府君居前)	身　色	赤黒色、		
	形　相	鬼形、火髪向上、		
	体　勢	下視文書、		
	両　手	居前作拳合掌、		
	着　衣	裸身、唯著赤犢鼻褌、	著赤縵袴、	
	坐　法	向尊(＝岱山府君)長跪、		
	その他	梵漢題名並闕、		

死鬼衆	体　勢	面向左方※8、仰視左手花、	向左、	
	右　手	拳當腰側、持豹皮囊、	持鈴、	
	左　手	向内、申頭指、接花似牡丹有葉、	持瓶、口挿蓮花、其一開合蓮四含蓮而一茎、	
	着　衣	无袈裟褌冠縵、唯有縵袴	皆有之（＝袈裟褌冠縵）、	
鬼衆女（在内）	身　色	赤黒色、		
	形　相	鬼形、被青髪、		
	体　勢	面少向左、		
	右　手	向内、持人臂、	含蓮、	
	左　手	持坏盛肉、當口俯就器、		
	着　衣	裸身、著犢鼻褌、	著赤縵袴、	
	坐　法	竪左膝坐、		
	台　座	無座、		
同上（在外）	体　勢	身向内院、		
	形　相	「鬼形」※9		
	右　手	指頭向右、屈而持坏盛肉、當口、		
	左　手	拳持人臂、當心、	仰掌、置齊下、	
	着　衣	「裸身、著犢鼻褌」※9		
	坐　法	左押右、交坐、		
	台　座	「無座」※9		
鬼衆（在内）	形　相	「鬼形」※9、青髪向上、	開口、	
	体　勢	身向外坐、視在中者、		
	右　手	竪拳當胸	竪掌屈四指、上少側右、	持人足、
	左　手	竪拳向胸、二拳相近、		持人臂、食之（＝人臂）、
	着　衣	「裸身、著犢鼻褌」※9		
	坐　法	右脚跪、左脚竪膝、		長跪、
	台　座	「無座」※9		
同上（在中東）	形　相	「鬼形」※9、被火髪、開張口、相視、		
	体　勢	身向前鬼、		
	右　手	開肘立、作拳、竪大指、	竪掌向右、	持人足食之
	左　手	覆掌當心、	仰掌少屈四指當心、	拳、開腕、
	着　衣	「裸身、著犢鼻褌」※9		
	坐　法	跪坐、	交脚坐、	
	台　座	「無座」※9		
同上（在中西）	形　相	「鬼形」※9、被火髪、		
	体　勢	向右而坐※10		
	右　手	向内、持人臂、		持坏、
	左　手	舒掌、覆心、	竪拳、申頭指、	持人足、
	着　衣	「裸身、著犢鼻褌」※9		
	坐　法	立左膝、		長跪、
	台　座	「無座」※9		
同上（在外）	形　相	「鬼形」※9、被青髪、		
	体　勢	身向内坐、		
	右　手	竪開肘、持人臂食之、其血滴下、	横持齧之（＝人臂）、	（不明）
	左　手	拳叉腰、		持坏、
	着　衣	「裸身、著犢鼻褌」※9		
	坐　法	右膝少竪、	立右膝、不交脚、	長跪、
	台　座	「無座」※9		

鬼衆(在内)	形　相	「鬼形」※9、火髪向上、		
	体　勢	面向右方、視在外者、		
	右　手	竪開肘向右、持人臂、	向外持(人臂)、	拳當胸、
	左　手	掌持坏當心、		持坏食、
	着　衣	「裸身、着犢鼻褌」※9		
	坐　法	左脚押右、	竪左膝、屈右※11脚、横立右足上、	長跪※12、
	台　座	坐一物上、		
同上(在外)	形　相	「鬼形」※9、青髪向上、	張口、	
	体　勢	向右、	左膝直竪※13	左膝直竪※13
	右　手	開肘、持人臂、		
	左　手	持坏、當心、		
	着　衣	「裸身、着犢鼻褌」※9		
	台　座	坐一物上、		
	その他			已上二鬼在荼吉尼在中者之左右、
荼吉尼衆一(在中)	身　色	周身赤肉色、	肉色、	
	形　相	赤髪髻、如天形、		
	体　勢	面向右		
	右　手	持人脚食之、		竪拳向内※14
	左　手	向内持人臂、	申指執(人臂カ)、	持刀※14
	着　衣	不被衣褌、単著縵袴、		被甲冑、
	装身具	項下環、		
	台　座	坐氍毹座		
同上一(在内)	身　色	周身赤色※14	肉色※14	
	形　相	赤髪※14、「如天形」※15		
	体　勢	向左、視在左者※16		
	右　手	竪肘、指頭向右、屈四指、持坏		坏、
	左　手	屈指向胸、	竪掌屈名小指、指上少側左、	拳叉腰、
	着　衣	「不被衣褌」「著縵袴」※15		
	装身具	「項下環」※15		
	台　座	「坐氍毹座」※15		
同上一(在外)	形　相	「如天形」※15		
	体　勢	面向右方、視在内者※17		
	右　手	開肘、指頭向右、屈四指、掌中持坏、	同(＝開肘、指頭向右、屈四指、掌中持坏)、唯當口、	
	左　手	向内、持刃未詳		拳叉腰、
	着　衣	「不被衣褌」「著縵袴」※15		
	装身具	「項下環」※15		
	坐　法	左脚押右、		
	台　座	「坐氍毹座」※15		
同上一鬼(在西偃臥)	形　相	鬼形、火髪聳竪、閇目、		
	体　勢	偃臥頭内足外、		
	二　手	舒著身側、		
	着　衣	「裸身、着犢鼻褌」※9		
	台　座	「無座」※9		
成就仙衆一仙(在内)	形　相	如童子形、被髪、		
	体　勢	面向左方、		

	右　手	竪掌向前、四指少屈、		
	左　手	持豹皮嚢、嚢口※18 繋肘上、従上出外其嚢非皮※19	屈臂仰掌、屈名中小頭、中間夾、	
	着　衣	不著衣、		
	装身具	有瓔釧等、脚著金環、	(脚)无(金環)、	
	坐　法	立右膝坐、	竪右脚、其左脚著地返屈足※20	
成就仙衆 一仙(在外)	身　色	赤肉色、	白肉色※21	白肉色※21
	形　相	「如童子形、被髪」※22、赤髪、		
	体　勢	面向右方、		
	右　手	開肘持物可勘赤※23	杖上半月上星、	
	左　手	向内、持豹皮嚢、		
	着　衣	「不著衣」※22、縵袴下著豹皮褌、		
	装身具	「有瓔釧等」※22		
	台　座			坐荷葉、
同上 一仙(在左内)	形　相	「如童子形、被髪」※22		
	体　勢	面向左方、		
	右　手	屈臂竪開肘、向身當右耳下、倒持豹皮嚢、		
	左　手	作拳叉於腰側※24、	覆掌、指太※25 垂下、	
	着　衣	「不著衣」※22		
	装身具	「有瓔釧等」※22	无脚環、	
	坐　法	左膝竪坐※26、指頭向前		
同上 一仙(在左外)	身　色			白色、
	形　相	「如童子形、被髪」※23、		
	体　勢	面向右方、		
	右　手	竪開肘、掌少覆向前、屈四指、		皮嚢、
	左　手	向内當肩下、持豹皮嚢、		拳叉腰※27
	着　衣	「不著衣」※23、		
	装身具	「有瓔釧等」※23、脚著金環、	(脚)无環、	
	坐　法	竪左膝少交而坐、	左押右交、	
	台　座			坐荷葉、
摩尼阿脩羅	身　色	周身赤色、		
	形　相	髪冠、赤髪、其冠縵端屈曲向上、		
	体　勢	面向右方、		
	右　手	屈臂、向内執刀、		
	左　手	拳叉腰、	掌叉腰、	
	着　衣	被甲、帯出従右腋繋肘上自外垂下、左蔽使者不見、脚著甲赤草履、		
	坐　法	左脚押右而坐、		
一使者(在右)	体　勢	面向尊坐、		
	右　手	屈臂、向内執杖、上金半月、	竪拳執刃未詳、	含蓮、
	左　手	(不見)		拳叉腰、
	着　衣	被襤褸袈裟、	无襤、	
	装身具	无瓔、	著瓔、	
	坐　法	右膝少竪、		
同上(在左)	体　勢	面向右方、		
	右　手	開竪肘、竪掌屈四指、		仰掌指端、
	左　手	拳持杖、上金半月右※28	持含蓮花、	
	坐　法	竪左膝、交坐、		竪右膝、

阿脩羅衆	身　色	通身赤色、		肉色、
	形　相	髪冠、赤髪、冠繒端向上、		宝冠、
	右　手	竪拳持棒、	拳持杖、	
	左　手	拳叉腰、	掌叉腰、	
	着　衣	被甲、甲上著青石草帯、		
	台　座			坐荷葉、
一使者(在右)	右　手	竪肘、仰掌指端向右、掌持坏器、	少仰掌、指頭持物[未詳]、	
	左　手	仰掌、指端右、掌少屈頭指當心、	大指少屈、	叉安腰、
	着　衣			被女衣、
一使者(在左)	形　相			童子形相、
	体　勢	面向右方、		
	右　手	竪肘、杖鉾、		三貼戟
	左　手	仰掌、屈名小指當斉下、	仰掌、垂下指端、	叉安腰
	坐　法	左脚押右、交坐、		長跪而坐、
迦樓羅王	身　色	周身黄色、	肉色、	
	形　相	鳥頭人身、髪髻、有翼、		
	体　勢	面向左方、		
	両　手	執篳篥吹、		吹横笛、
	台　座			坐荷葉、
迦樓羅女	身　色		肉色、	
	形　相	如前(= 鳥頭人身、髪髻、有翼)、		
	体　勢	面向右方、		
	両　手	持螺吹之、		
	着　衣	无衣、	有之(= 衣)、	
	坐　法	左脚押右交坐[※29]	竪右膝、交坐、	
鳩盤荼	身　色		白色、	
	形　相	馬頭人身、		
	体　勢	面少向左、	正向、	
	両　手	跏上横置一皷、作撃之勢、		
鳩盤荼女	身　色	身黄色、	白色、	肉色、
	形　相	如前(= 馬頭人身)、		
	体　勢	面少向左、		
	両　手	持銅鉢子、有緒、	无(緒)、	
	坐　法	右足向右、	左押右、交坐、	

※1　建武本では「圖」と表記するが、「面」の誤写と判断した。
※2　御室版を考慮に入れて山図の記述と判断した。
※3　御室版を勘案して現図の記述と判断した。
※4　建武本では「垂」と表記するが、「乗」の誤写と判断した。
※5　建武本では「其中」と表記するが、仏全本の表記を採用し「其牛」と改めた。
※6　御室版の図像を考慮に入れると「舒屈頭指」の「屈」の文字は衍字か。
※7　建武本では「膝開」と表記するが、長福寺本、仏全本の表記を勘案して「膝前開布」と改めた。
※8　建武本では「面向左手」と表記するが、長福寺本、仏全本の表記を勘案して「面向左方」と改めた。
※9　「鬼形」「裸身、着犢鼻褌」とあることについて「鬼衆女及鬼衆臥鬼、其形大都等同、皆無座」と記しており、「現図」の当該尊の該当項目に「　」を付して振り分け表記した。
※10　「向右而坐」とあるが、御室版の図像を参照するとき、「向左而坐」とすべきか？
※11　建武本、長福寺本ともに「竪左膝、屈左脚」と表記するが、文章から判断して「竪左膝、屈右脚」の誤写と判断した。
※12　建武本では「跪」と表記するが、長福寺本、仏全本の表記にしたがい「長跪」に改めた。

※13　「二圖左膝直垂竪」とあり、当該事項を或図と山図に振り分けて記した。
※14　建武本では「竪拳竪肘」と記すが、一行分程度の脱文があるようであり、仏全本と長福寺本ではともに「竪拳向内、左手持刀、一[在内]、周身赤色、赤髪、或圖肉色、右手竪肘」と記しており、この記述にしたがった。
※15　「以下三尊如天形坐氈毗座、不被衣褌單著縵袴、項下環」とあり、現図の当該尊の該当項目に「　」を付して記述を振り分けた。
※16　御室版の図像を考慮に入れて「視在右者」を「視在左者」に改めた。
※17　建武本では「省」と表記するが、「者」の誤写と判断した。
※18　建武本では「嚢」と記すが、長福寺本に「嚢口」とあることにしたがった。
※19　「嚢口繫肘上、従上出外其嚢非皮」とあることを、現図の記述と解したが、或図の記述であった可能性もある。
※20　長福寺本では「竪右脚、其左脚著地返屈足」を「一仙在外」の「或圖」のこととして記述する。
※21　「二圖白肉色」とあり、当該事項を或図と山図に振り分けて記した。
※22　「有四仙衆如童子形、被髪、不著衣、有瓔釧等」とあり、現図の当該尊の該当項目に「　」を付して振り分けた。
※23　建武本では「可勘赤」と表記するが、仏全本、長福寺本では「可勘」とする。
※24　建武本では「作拳於腰側」となるが、仏全本、長福寺本の記述を考慮し「於」の直前に「叉」の文字を補った。
※25　建武本では「指太垂下」と表記するが、長福寺本の当該部は「大指垂下」と表記している。
※26　建武本では「膝竪坐」と表記するが、仏全本と長福寺本の当該部の記述にしたがい「左膝竪坐」と改めた。
※27　建武本では「右拳叉腰」とあるが、長福寺本、仏全本が記すように「左」手の記述と判断した。
※28　建武本、長福寺本ではともに「拳持杖、上金半月右」とあるが、「右」の文字は衍字とみるべきか。
※29　建武本では「左脚右交坐」と表記するが、長福寺本、仏全本における当該記述を考慮して「右」の直前に「押」の文字を補った。

『諸説不同記』巻第八（後半）翻刻・校註・影印

《凡例》以下に、『大正新修大蔵経』図像1の底本となった東寺観智院金剛蔵伝来の建武二年（一三三五）写『諸説不同記』巻第八（一帖）の後半（「難陀龍王」以降）について、極力原本に忠実に翻刻する。翻刻にあたって次の点に配慮した。

一、本文の行取り・使用漢字は出来る限り原本通りとした。ただし、文字数が多く一行で収まらない場合は、無理をせず次行に折り返した。底本では、それぞれの尊名、梵号、密号、三摩耶形の書き出しの位置が一定しておらず、翻刻にあたっては尊号の書き出しの位置を本文の書き出しと同じ高さに揃え、梵号、密号、三摩耶形の書き出しは、それぞれ一字下げに統一した。

二、底本において使用された異体字のうち、正字に改めたものは従前通りである（『史友』四四号七二頁参照）。

三、翻刻した本文各行の下には通し番号を付した。この番号はそのまま行番号を兼ねるとともに、後掲の校訂註（校註）の番号と対応する。なお、当該行に註記等の必要がない場合は空欄のままとした。

四、底本に認められる脱文箇所については後述の長福寺本をもって字句を補った（443～477、516行目）。なお、当該箇所についてはその部位がわかるように点線で囲んだ。

五、本文中の誤字・脱字について、伝世の過程で付されたとみられる訂正・書き込み・貼り込みのすべてについて、翻刻した本文中には示さず、後掲の当該行校註において【書き込み】【貼り込み】を明示して記した。

六、『諸説不同記』諸本との対校により誤字・誤写・脱字が明らかな場合においても原本のままとし、当該行校註においてその旨を示した。また、文字や字句が諸本と異なる場合も、当該行校註においてその旨を示した。対校に用いた『諸説不同記』諸本とその略称は以下の通りである。

・大正蔵　『大正新脩大蔵経』図像第一巻所収本（この東寺観智院金剛蔵本を底本とし、『大日本仏教全書』本によって適宜対校し、一九三三年に翻刻刊行）。
・仏全本　『大日本仏教全書』所収本（東北大学図書館狩野文庫本を底本として、一九一三年に翻刻刊行）。
・長福寺本　東寺観智院金剛蔵本『諸説不同記』第八（四〇箱第七号、院政期～鎌倉初期写）。

七、本文中にあらわれた難読文字については、『類聚名義抄』の字訓を当該行校註に〔補足〕として掲げた。使用した『類聚名義抄』は、正宗敦夫校訂『類聚名義抄』（風間書房、一九七八年）に拠った。

八、丁ごとに「」を附して丁数を示すとともに、表はオ、裏はウと表記した。

九、本文中、各尊の冒頭にある白描の三摩耶形（図）は版組の都合上、翻刻文の後に一括して掲げた。

十、原本との照合が可能なように翻刻・校註のあとに影印（モノクロ写真図版）を掲げた。

十一、大正蔵本ならびに仏全本は、旧字体で表記をしており、使用文字の違いも校訂註の対象とした。ただし、以下の文字については翻刻に際しての煩雑を避けるため、その異同については明示しなかった。

教務尊専虚飾悦鋭説兼益平起
歩節即増層僧逢通迦遍遮連蓮
毘算尚黄横青請清情静状将荘
猶害強弱曜習悩忍普隠福神祖
視祥練縁緑絶豊悪亜秘徳瓦熙
浮誤廻坐座雑者挿并拳乳

「」（22ウ）

難陀龍王
梵号 𑖦𑖽𑖨𑖿 種子 𑖦 囊初 名不可得故
三摩耶形 刀圖〔図〕
已下二尊経釈不説、在北方、玄法儀軌列之、現圖在於門中右邊阿修羅後、首有七龍光、右手向身持刀、或圖竪拳持之、左掌叉腰、或圖左拳叉腰、山圖左索、面向左方、无冠繒、
烏波龍王
梵号 𑖤𑖽𑖨𑖿 種子 𑖦 囊初 名不可得故
三摩耶形 同上〔図〕
現圖在難陀之左邊、有七龍光、右手向内執刀、左手竪掌向身當妳、或圖仰掌屈四指、掌持含蓮、山圖右叉腰、左刀、圖向右方、无冠繒、
阿脩羅王衆
梵号 𑖪𑖽𑖨𑖿 種子 𑖪 引初 寂静故
三摩耶形 刀圖

「（23オ）

所傳圖阿脩羅女眷属阿修羅眷属在西南方羅
刹主左、蔵品釈云修羅名天以帯阿聲故、名為非
阿修羅、略説、天有四種所謂生天世天浄天第義天、入
阿字門皆悉不可得故、又成就最太身故、毘盧舎那
阿修羅義云々、現圖一在門内右、右手向内持刀當於妳
上、或圖棒、左拳申小叉腰、或圖仰拳叉之、竪右膝坐、
面向左方无冠繒、一在左、右手向内持刀當持妳上、左手
仰
拳當於斉下、面向右方、山圖右拳叉腰、左刀、无冠繒、

「（23ウ）

已上在門下
南門

（註347）（註348）（註349）（註350）（註351）（註352）（註353）（註354）（註355）（註356）（註357）（註358）（註359）（註360）（註361）（註362）（註363）（註364）（註365）（註366）（註367）（註368）（註369）（註370）（註371）（註372）

兩柱上置緑寶、或圖青寶、其柱有種々莊嚴不委記（註373）
之、横木中央有黄色獸、含其横木上下齒現、左右邊有（註374）
手従横木下出前、獸頭上蓮上青寶有焔、或圖頭上半（註375）
月々々上緑寶、有瓔珞従獸口下垂、（註376）
焔摩羅王（註377）
梵号 𑖨𑖾𑖭𑖿𑖟𑖿 種子 𑖨𑖿 縛无音反 語言道断故（註378）
」（24オ）
三摩耶形 人頭棒〔図〕（註379）
具縁品云、右方閻魔王、手秉檀拏印、水牛以為座、震（註380）
電玄雲色、（註381）
釈云、次於左方在大日之南、作焔魔法王、手執檀拏印、
此（註382）
猶如棒形、上有人首、作極忿怒之状、以水牛為座、身作
黒（註383）
玄色、阿闍梨言、少時嘗因重病因絶神識、往詣冥司、（註384）
覩此法王与后、同共語言、兒甚慈忍、然此檀拏印以（註385）
忿怒形、検校生來所犯、口出火光至為厳切、及験出家（註386）
」（24ウ）
以後功業便尓寂然不復有言、儉摩王及后尋即降（註387）
階、善言稱歎慇懃致敬求受飯戒、因放却還、此至（註388）
蕪後、其兩臂縄所繋持處猶有瘡痕、旬月方愈也、（註389）
秘密品云、閻摩但荼印、常處風輪中、釈云南方閻摩（註390）
王當作風壇々中畫荼印 若印等此壇一角向身、一角為向外也、或隨便安置 、蔵品釈云是（註391）
焔摩明王主奪一切衆生命根、是故従无明行業生者（註392）
无能出其境界、是故経云无上諸世尊縁覺聲聞衆（註393）
尚捨无常身、何況諸凡夫、明此死王威勢最大也、（註394）
」（25オ）
現圖在門西、或圖赤黒色、右手側仰掌、指頭向右少竪、（註395）
或圖仰掌指頭向右屈頭指、左手向内執檀荼杖、頭（註396）
有金半月形上有一人頭髪髻、垂臥白水牛垂左脚、（註397）
其中在毯座上、面向右方、或圖正向垂青水牛、有山圖（註398）
絡結角根、同或圖、（註399）
黒闇天女（註400）
梵号 𑖨𑖾𑖭𑖿𑖟𑖿 種子 𑖨𑖾 軌通 如々不可得故（註401）
三摩耶形 幢〔図〕（註402）
」（25ウ）
具縁品云并黒夜、釈云東邊作黒夜神、秘密品云黒（註403）
夜計都印、釈云左邊畫黒暗后以幢為印、（註404）
所傳圖在質咀羅笈多右、蔵品云黒夜神、是焔摩（註405）
侍后、迦羅名黒、囉怛囉哩曳名夜、此黒夜名即為真（註406）
言、黒衣晦冥真、是一切鬼物魑魅所行之處、諸生霊（註407）
等多懐恐怖衰悩之時、獨此神於黒夜中威勢自（註408）
在、亦能理其眷属不令非法損悩也、世間如是无明黒夜、（註409）
亦是三界凡夫怖畏不安穏、常有種々煩悩、鬼魅自恣（註410）
」（26オ）
遊行、全黒夜真言即安住其中、不思議解脱故、現圖在（註411）

焔摩左之内、右手仰掌指端向外少屈、或圖竪掌（註412）
如施无畏、左手拳執檀拏杖、頭有半月形上有人（註413）
頭童子面状、或圖人頭有髪髻、山圖右仰掌當心（註414）
持髑髏、左手持棒上置髑髏、面向左方、仰視焔摩、（註415）
无冠繒、（註416）
岱山府君（註417）
梵号 𑖨𑖾𑖭𑖿𑖟𑖿 種子 𑖨𑖾 軌通 如々不可得故（註418）
」（26ウ）
三摩耶形 人頭棒圖〔図〕（註419）
経釈不説、三蔵儀軌云判官諸鬼属、玄法儀軌云奉（註420）
教官、所傳圖云質咀羅笈多訊獄者在閻摩右、（註421）
現圖右手垂下舒屈頭指屈餘指執筆、膝開布（註422）
畫巻、作點畫勢、或圖屈諸指把敷紙、左手垂下（註423）
舒覆掌當腰側持檀拏杖、端有金環々中有人面、（註424）
或圖當腰側、向内持物、面向右伏面下視、有一鬼々形裸（註425）
身、（註426）
唯著赤犢鼻褌、以下鬼皆同之、或圖皆著赤縵袴、（註427）
」（27オ）
是為好、赤黒色、火髪向上、居前作拳合掌、向尊長（註428）
跪、下視文書、梵漢題名並闕、山圖前置硯、（註429）
死鬼衆（註430）
梵号 𑖨𑖾𑖭𑖿𑖟𑖿 種子 𑖨𑖿 没哩二合（註431）
三摩耶形 鈴〔図〕（註432）
具縁品云死后等圍繞、釈云閻摩之西作閻摩（註433）
后及死后亦是閻摩后也、秘密品云没栗底鈴印、（註434）
釈云王右邊畫死后、以鈴為印、若畫形即持之、諸儀（註435）
」（27ウ）
云焔摩后鐸、所傳圖閻摩没嘌底后、在閻魔后之（註436）
左、現圖在岱山府君左、有二鬼一天、一左内者傳云、死后是死鬼、右手拳（註437）
當腰側持豹皮嚢有疑、或圖持鈴、左手向内申頭（註438）
指接花似牡丹有葉、或圖持瓶口插蓮花、其一開（註439）
合蓮四含蓮而一茎、此曼荼羅朽古、此尊手印不（註440）
分明、面向左手、仰視左手花、或圖向左、无袈裟褌（註441）
冠繒、唯有縵袴、或圖皆有之、私云此死后有疑、圖云（註442）
死鬼衆而不言死后、在荼吉尼衆中者、豈非死后、恐（註443）
」（28オ）
是三蔵儀軌所謂妃者乎、彼軌云死后妃圍繞、今按圖欠妃（註444）
故云五大院此次別立焔魔妃一鬼在中、（註445）
鬼衆女 梵号 𑖨𑖾𑖭𑖿𑖟𑖿（註446）
種子 𑖨𑖾 毘初 三摩耶形 劫波圖〔図〕（註447）
所傳圖有毘舎支十眷属、印品説諸毘舎支印（註448）
言、私云軌毘舎支真言、在北方、鬼形裸身著犢（註449）
鼻褌、赤黒色、被青髪、右手向内持人臂、或圖
」（長福寺本33ウ）
右含蓮、左手持坏私案之頭骨盛肉當口俯就器、或圖（註450）
著赤縵袴、面少向左、竪左膝坐、鬼衆女及鬼衆（註451）

臥鬼、其形大都等同、皆無座、一鬼在外、右手指
頭向右屈而持坏盛肉當口、左手拳持人臂當
心、或圖仰掌置齊下、身向内院、左押右交坐、有
四鬼一鬼在内、
鬼衆
梵号 𑖨𑖿𑖩 種子 𑖦 毘初
三摩耶形 劫波圖同上
所傳圖有毘盧遮十眷属、私云盧字恐舍字
誤乎、蔵品説諸毘舍遮真言、釋云毘舍遮是
極苦楚義、以是餓鬼趣故、常為飢渇熱悩之
所逼切因以為名、印品又説諸毘舍遮印明、三蔵
軌列北方多聞眷属之中、彼文云門東毘舍遮
即名毘舍支云々、私云其真言在彼列之、現圖在
」（長福寺本34ウ）
鬼衆女之左、青髪向上、右手竪拳當胸、或圖
竪掌屈四指、上少側右、左手竪拳向胸、二拳相
近、右脚跪左脚竪膝、身向外坐、視在中者、或圖
開口、山圖右手持人足、左持人臂食之、長跪、一鬼
在中東被火髪、右手開肘立作拳竪大指、或圖
竪掌向右、左手覆掌當心、或圖仰掌少屈
四指當心、身向前鬼而跪坐、或圖交脚坐、開張
」（長福寺本35オ）
口、相視、山圖右持人足食之、左拳開腕、一鬼在中、
西被火髪、右手向内持人臂、左手舒掌覆心、或
圖竪拳申頭指、立左膝、向右而坐、山圖右手
持坏、左持人足、長跪、一鬼在外、被青髪、右手竪
開肘持人臂食之、其血滴下、或圖横持齧之、左拳叉腰、
右膝少竪、身向内坐、或圖立右膝不交脚、山
」（長福寺本35ウ）
圖左手持坏、右手不明、長跪、下有二鬼、坐一物上私案未祥、蓋是風輪
人臂、或圖向外持、左掌持坏當心、面向右方視在外者、
左脚押右、或圖竪左膝屈左脚、横立右足上、山圖右拳
當胸、左持坏食、跪、一鬼外、青髪向上、右手開肘持人
臂、左手持坏當心、向右、二圖左膝直垂竪、或圖張口、山
圖
已上二鬼在荼吉尼在中者之左右、
鬼衆脱梵号 種子印同上、
」（28ウ）
儀軌坐位圖無後鬼衆、現圖在鬼衆左、
荼吉尼衆
梵号 𑖨𑖿𑖩 種子 𑖦 含通 因不可得故
三摩耶形 劫波圖〔図〕
秘密品云烏鷲及婆栖野干等囲繞、釋云七母等
眷属謂烏鷲狐及栖鳥似鴉鴉小黄王色、辨亦黄是、鵄類也、此鳥有秘身法也、此等並在風輪中、囲繞七母等在風輪中也、若持花得
此鳥等亦持七母真言也、此等各別自有持誦法、令
」（29オ）
入此漫荼羅會故耳、皆悉以為荘厳、私云烏鷲婆栖
未見可勘、
蔵品釋云又拏枳抳真言、此是藥叉趣、世間所傳云属摩
迦羅天、有受其呪術者為彼所加持故、亦好食人心、故
法花云吉蔗若人吉蔗是也、凡人身、或有黄藥如牛黄之
類、若彼過而食之、便得最上成就、能於一日中用行西域、
随
意所為、然彼法亦不得无故殺人、要知彼令期欲盡於
六月内、方得取之、以幻術潜盗、其心更用餘物代之、彼
雖
」（29ウ）
失其常性、猶固未死、要至命期盡時、乃散壞耳、毘盧
舎遮那以降三世法門化作大黒神、具大威力、以灰
塗身於曠野中作法、悉召拏枳抳輩而呵責之、以
汝常殺人、故今當食汝、以方便為彼衆而呑之、彼等
怖畏咸皈命佛、然後捨之、制令不殺、彼白佛言、我若
不食肉者如何自済、佛言聽汝食死人心、彼白佛言
人欲死時諸大藥叉等競来争取、云何可得、佛
言聽於六月内以呪法加持之、至命盡時聽汝取食
」（30オ）
為調伏衆、令入佛恵、故説此処真言、所傳圖荼迦
荼吉尼在伊舎那方、禅門云現圖亦在北方、現圖在
鬼衆左有三天一屋臥鬼、一在中赤髪髻、周身赤肉
色、或圖肉色、右手持人脚食之、左手向内持人臂、或圖
申指執、面向右、以下三尊如天形坐氈斧座、不被
衣褌、單著縵袴、項下環、山圖被甲冑、右手竪拳
向内、左手持刀、一在内、周身赤色赤髪、或圖肉色、右手
竪肘指頭向右、屈四指持坏、左手屈指向胸、或圖竪
掌屈名小指、指上少側左、山圖右坏、左拳叉腰、向左視
在
」（30ウ）
右者、一在外、右手開肘指頭向右、屈四指掌中持坏、或
圖同、唯當口、左手向内持刃未詳、面向右方視在内
省、左脚押右、山圖左拳叉腰、一鬼在西偃臥者鬼形、火
髪聳竪、閇目、偃臥頭内足外、二手舒著身側、私疑
是死后歟、
秘密品云、
閻摩但荼印、常處風輪中、没栗底鈴印、黒夜計都印、
勞達羅輪羅、大梵妃蓮花、但摩利鑁底、毘瑟女輪印、
」（31オ）
當知儀摩后、以没揭羅印、嬌吠離耶后、用劫跛羅印、
如是等皆在、風漫荼羅中、烏鷲及婆栖、野干等圍繞、

釈云南方閻摩王、當作風壇々中畫但荼印□印 （註529）
等、此壇一角向身一角向外也、王右邊畫死后、以鈴為 （註530）
印、若畫形即持之、或随彼便安置左邊、畫黒夜后、 （註531）
以幢為印【図】此幢也、梵云計都亦旗也、大自在忿 （註532）
怒作輪 𑖪𑖽 羅 𑖪 印【図】、此輪羅也、大自在 （註533）
子之后作鑁底印【図】此鑁底也、大梵天明妃作蓮印、 （註534）
」（31ウ）
謂未開蓮也、𑖪 那 𑖪 羅 𑖪 延作輪印【図】、七母 （註535）
等天同用没薩羅印【図】、此是也、𑖪 俱 𑖪 吠 𑖪 離 （註536）
𑖪也、作在毘沙門方、頂骨印【図】此顱骨也、以笑手状
以持 （註537）
持之、謂屈水地指於掌中、散舒餘三指、如笑手状、
頂骨如持鉢状、七母等眷属、謂烏鷲狐及 𑖪 婆 𑖪 栖鳥（註539） （註538）
似鵄鵄小黄土色、弊赤黄是、鵄類也、此鳥在秘身法也、
若持花得此鳥等亦持七母真言也、此等各別自有持誦法、（註541） （註540）
令入此漫荼羅會、故耳皆悉以為荘厳、 （註542）
私云鍐摩眷属有十六尊、死后一没栗底、黒夜二輪、大自在 （註543）
」（32オ）
三漫達羅、俱摩梨四大自在子之、大梵妃五未開、那羅延六輪、焔摩后 （註544）
七夜摩女、没揭羅印、七母等一、私云於中攝帝釋女、遮悶拏、自在女、倶吠 （註545）
離耶后倶胝頭骨印女、又有烏二、鷲三、野干四、婆栖五、并焔摩為十六、 （註546）
具縁品云左方閻摩王云々、七母并黒夜死后等圍繞、釋云 （註547）
次於左方東大日之南作鍐魔法王云々、閻魔之西作閻后及死
后、亦是閻摩后也、又東邊作黒夜神及七摩怛里、釋云七母 （註548）
（註549）
皆女鬼也、其形悉皆黒色、私云此品有十一尊、閻魔一七
母八黒夜九 （註550）
焔摩后十死后十一、 （註551）
」（32ウ）
蔵品説閻摩死王、黒夜神、七母等、諸荼吉尼、 （註552）
五ケ真言、 （註553）
印品説鍐魔倶荼印、焔摩后二鐸印、暗夜四羅王后也案輪印也、三、 （註554）
梵天明妃執蓮花、嬌末離鑁底印大日形四、那羅延后輪印、五、六、 （註555）
焔摩七母七鐸印、遮文荼劫鉢羅鬼也八、八ケ印相、 （註556）
又説諸毘舎遮、諸毘舎支、諸荼吉尼、三ケ印真言、 （註557）
并十三尊十一印三真言、 （註558）
成就仙衆 （註559）
」（33オ）
梵号 𑖪𑖽𑖪𑖽𑖪𑖽𑖪𑖽𑖪𑖽 種子 𑖪 躭通 如々不可 （註560）
得故 三摩耶形 （註561）
所傳圖悉地持明仙悉地持明仙妃、在風天護方 （註562）
神左、釈云悉地持明者、皆是専依呪術得悉地人云々、現 （註563）
圖在荼吉尼衆左、有四仙衆如童子形、被髪、不著衣、有 （註564）
瓔釧等、一仙在内、右手竪掌向前、四指少屈、左手持豹 （註565）
皮嚢、或圖屈臂仰掌、屈名中小頭中間夾、嚢繋 （註566）
肘上、従上出外其嚢非皮、立右膝坐、脚著金環、或圖无、 （註567）
」（33ウ）
面向左方、或圖竪右脚、其左脚著地返屈足、一仙在外、身 （註568）
赤肉色、赤髪、縵袴下著豹皮褌、右開肘持物可地赤、 （註569）
或圖杖上半月上星、左手向内持豹皮嚢、面向右方、二圖（註570）
白肉色、山圖坐荷葉、一仙内在左、右手屈臂竪開肘、向身 （註571）
當右耳下、倒持豹皮嚢、左手作拳於腰側、或圖覆 （註572）
掌、指太垂下、膝竪坐、指頭向前、面向左方、或圖无脚（註573）
環、一仙在左外、右手竪開肘、掌少覆向前、屈四指、左手向 （註574）
内當肩下、持豹皮嚢、竪左膝少交而坐、脚著金環、或圖（註575）
」（34オ）
左押右交、无環、面向右方、山圖白色、右手皮嚢、右拳 （註576）
叉腰、 （註577）
坐荷葉、摩尼阿脩羅、 （註578）
梵号 𑖪𑖽𑖪𑖽𑖪𑖽𑖪𑖽𑖪𑖽 種子 𑖪 摩初 縛不可得故、三 （註579）
摩耶形 刀圖
三蔵儀軌云婆稚阿脩羅女、所傳圖阿脩羅并眷属在 （註580）
涅哩底護方神左、現圖在成就仙衆左、周身赤色、被甲、帯 （註581）
出従
右腋繋肘上自外垂下、左蔽使者不見、髪冠赤髪、其冠繒端 （註582）
屈曲向上、右手屈臂向内執刀、左拳叉腰、左脚押右而坐、 （註583）
」（34ウ）
脚著甲赤草履、面向右方、或圖左掌叉腰、有二使者、 （註584）
一使者在右、被襤褸袈裟无瓔、或圖无襤著瓔、右手 （註585）
屈臂向内執杖、上金半月、左手不見、右膝少竪、面向尊（註586）
坐、或圖竪拳執刃未詳、山圖含蓮、左拳叉腰、一使者左、（註587）
右手開竪肘竪掌屈四指、左手拳持杖上金半月右、 （註588）
或圖持含蓮花、山圖右手仰掌指端、面向右方、竪左 （註589）
膝交坐、山圖竪右膝、 （註590）
阿脩羅衆 （註591）
」（35オ）
梵号 𑖪𑖽𑖪𑖽𑖪𑖽𑖪𑖽𑖪𑖽 二 種子 𑖪 阿初 本不生故 （註592）
三摩耶形 棒圖〔図〕 （註593）
現圖在摩尼阿脩羅之左、通身赤色、被甲、髪冠、赤髪、（註594）
冠繒端向上、甲上著青石草帯、右手竪拳持棒、左 （註595）
拳叉腰、或圖右拳持杖、左掌叉腰、山圖肉色、宝冠、坐（註596）
荷葉、有二使者、一使者在右、右手竪肘仰掌指端向右、掌 （註597）
持坏器、或圖少仰掌指頭持物未詳、左手仰掌指端 （註598）

右、掌少屈頭指當心、或圖大指少屈、山圖被女衣、左叉（註599）
」（35ウ）
安腰、一使者在左、右手竪肘杖鉾、左手仰掌、屈名小（註600）
指當斉下、或圖仰掌垂下指端、面向右方、左脚押右交（註601）
坐、山圖右三肱戟、左叉安腰、童子形相、長跪而坐、（註602）
迦樓羅王（註603）
梵号 𑖀𑖪𑖽𑖿 二 種子 𑖀 哉初 一切行不可得故（註604）
三摩耶形 楽器圖〔図〕（註605）
所傳圖在西北方在風天護方神右、現圖在摩尼阿脩（註606）
羅衆左之内、鳥頭人身、髪髻有翼、周身黄色、或圖肉（註607）
」（36オ）
色、二手執篳篥吹、面向左方、山圖吹横笛、坐荷葉、（註608）
迦樓羅女（註609）
梵号 𑖀𑖪𑖽𑖿 二 種子 𑖀 哉初 一切行不可得故（註610）
三摩耶形 楽器圖〔図〕（註611）
現圖在摩尼阿脩羅王之左外、形像如前、无衣、或圖有（註612）
之、兩手持螺吹之、面向右方、左脚右交坐、或圖肉色、竪（註613）
右膝（註614）
交坐（註615）
鳩盤荼（註616）
」（36ウ）
梵号 𑖌𑖼𑖫𑖿 二 種子 𑖌 鳩初 作業不可得故（註617）
三摩耶形 楽器圖〔図〕（註618）
所傳圖鳩盤荼衆眷属耳馬耳羊耳等在伊（註619）
舎那之右、現圖在迦樓羅之左、馬頭人身、跏上横置一（註620）
皷、兩手作擊之勢、面少向左、或圖白色正向、（註621）
鳩盤荼女（註622）
梵号 𑖌𑖼𑖫𑖿 種子 𑖌 倶初 離作業故（註623）
三摩耶形 楽器圖〔図〕（註624）
」（37オ）
現圖在迦楼羅女左、形像如前而身黄色、或圖白色、兩手（註625）
持銅鈸子有緒、或圖无、山圖肉色、面少向左、右足向右、（註626）
或圖（註627）
左押右交坐、所傳圖南方有緊那羅、緊那羅妃、末囉弭、（註628）
咤捺唎、燕捺利、嬌唎、吠瑟拏味、嬌吠唎、遮悶拏私云、以上（註629）
七姉妹也、賢劫菩薩、別異地獄、比丘衆、童女菩薩、（註630）
菩薩衆、南方无優徳佛、大般若優為憂、字離（註631）
優菩薩、大般若優為憂、童男菩薩、弁才天、夜（註632）
黒天、質咀羅笈多訊獄者、閻摩羅王、閻摩但荼（註633）
」（37ウ）
閻羅后、閻摩殘栗底后、毘楼博叉王、熱悩地獄、（註634）
寒冷地獄、毘舎支十眷属、毘盧遮十眷属私云、疑字、舎字誤歟、（註635）
摩訶迦羅黒神、諸毘那夜迦、芻陵蟻噉知、釈云南（註636）
方芻陵吃噉知、是摩醯首羅子、身極枯痩、以常降（註637）
伏怨敵假使骨肉消盡、要令得勝故為此形、私謂即（註638）
是智度所云常脩苦行割肉祀火感生諸悪神者（註639）
」（38オ）
大悲胎蔵普通大曼荼羅記巻第八（註640）
八坂吉祥園院本（註641）
」（38ウ）
仁安二年六月十六日於菩提院書了　行宴（註642）
于時建武二年乙亥六月十一日　於神照寺本堂書了（註643）
幸秀
」（裏表紙裏）

校註

(348)(347) 号→「號」大正蔵、仏全本。
𑖀𑖪𑖽𑖿→「𑖀𑖪𑖽𑖿（𑖀 本一）」仏全本。
(350)(349) 二尊→「四尊」仏全本。
経釈→「經釋」大正蔵、仏全本、「経釋」長福寺本。
在北方→「在此方」仏全本、長福寺本。
玄法儀軌列之→「北方門内置難陀烏波龍」『大毘盧舎那成仏神変加持経蓮華胎蔵悲生曼荼羅広大成就儀軌供養方便会』巻第二（『大正蔵』18―一二三b）。
(352)(351) 或圖左拳→「或圖右拳」仏全本。
(353) 无→「無」大正蔵、仏全本。
(354) 号→「號」大正蔵、仏全本。
(355) 名不可得故→「（ナシ）」仏全本。
(356)(357)(358) 妳→「嬭」大正蔵、仏全本。
屈四指、掌→「（ナシ）」仏全本、「指頭向前掌屈四指、掌」長福寺本。
(359) 圖→「面」大正蔵、仏全本、長福寺本。
无→「無」大正蔵、仏全本、長福寺本。
繒→「僧」長福寺本。
(360) 脩→「修」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(361) 号→「號」大正蔵、仏全本。
𑖀→「𑖀」大正蔵、仏全本。
(362)(363) 𑖀𑖨𑖿 引→「𑖀𑖨𑖿 阿引」大正蔵、長福寺本、「阿引」仏全本。
初寂→「初寂」大正蔵。
刀圖→「刀」大正蔵、仏全本。
所傳圖→『義釈』巻第四・阿闍梨所伝漫荼羅図位（『続天台』密教1―一五九頁）。
阿脩羅女→「阿修羅女」大正蔵、仏全本。
阿修羅→「阿脩羅」長福寺本。

属→「屬」大正蔵、仏全本。

(364) 蔵品釈云修羅名天～阿修羅義云々→『義釈』巻第七・普通真言蔵品第四（『続天台』密教1—三四七頁上）。
蔵→「藏」大正蔵、仏全本。
釈→「釋」大正蔵、仏全本、長福寺本。
修→「脩」長福寺本。
為→「爲」大正蔵、仏全本。
(365) 修→「脩」長福寺本。
浄→「淨」大正蔵、仏全本、長福寺本。
第義天→【上縁貼紙】「第義天他本ニハ第一義天云々」。「第一義天」大正蔵、仏全本。〔参考〕「第一義天」『義釈』（『続天台』密教1—三四七頁上）。
(366) 故→「故是」大正蔵、仏全本、長福寺本。〔参考〕「故是」『義釈』（『続天台』密教1—三四七頁上）。
(367) 修→「脩」長福寺本。
妳→「嬭」大正蔵、仏全本。
(368) 申小→「（ナシ）」仏全本。
(369) 无→「無」大正蔵、仏全本、長福寺本。
妳→「嬭」大正蔵、仏全本。
(370) 斉→「臍」大正蔵、仏全本、「齊」長福寺本。
无→「無」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(371) 門下→「門中」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(372) (373) 兩→「南」大正蔵、仏全本。
寶→「寶」大正蔵、仏全本。
(374) 獣→「獸」大正蔵、長福寺本。「獸頭」仏全本。
含→〔補足〕唅「クラフ」『類聚名義抄』佛中二七。
(375) 従→「從」大正蔵、仏全本。
獣→「獸」大正蔵、仏全本、長福寺本。
寶→「寶」大正蔵、仏全本。
有焔→「（ナシ）」仏全本、長福寺本。
或圖頭上→「或圖緑寶頭上」大正蔵、仏全本、「或圖緑寶有焔頭上」長福寺。
(376) 半月々々上緑寶→「半月半月上緑寶」大正蔵、「半月半月上」仏全本、「半月々々上」長福寺本。
従獣→「從獸」大正蔵、仏全本。
(377) (378) 号→「號」大正蔵、仏全本。
縛→「嚩」大正蔵、仏全本、長福寺本。
无→「無」大正蔵、仏全本、長福寺本。
言語同断故→「言語同斷故」大正蔵、「（ナシ）」仏全本。
(379) (380) 具縁品云、右方閻魔王～震電玄雲色→『大日経』巻第一・入漫荼羅具縁真言品第二之一（『大正蔵』18—八a）。
右方→「左方」仏全本。
閻魔王→「閻摩王」大正蔵、仏全本、長福寺本。〔参考〕「閻摩王」（『大正蔵』18—八a）。
為→「爲」大正蔵、仏全本。
(381) (382) 釈云、次於左方在大日之南、作焔魔法王～猶有瘡痕旬月方愈也→『義釈』巻第四・入漫荼羅具縁真言品第二之二（『続天台』密教1—一四五頁上～下）。
釈→「釋」大正蔵、仏全本、長福寺本。

左→〔参考〕「右（傍書「右イ〈ヘ左」）」『義釈』（『続天台』密教1—一四五頁上）。
(383) 在→〔参考〕「東（傍書「東ホ直〈ヘ在」）」『義釈』（『続天台』密教1—一四五頁上）。
魔→「摩」大正蔵、仏全本、長福寺本。〔参考〕「摩（傍書「摩イ魔」）」『義釈』（『続天台』密教1—一四五頁上）。
此→〔参考〕「（ナシ）（傍書「イ此」）」『義釈』（『続天台』密教1—一四五頁上）。
(384) 棒→〔参考〕「棓（傍書「棓イロホ〈ヘ棒」）」『義釈』（『続天台』密教1—一四五頁上）。
為→「爲」大正蔵、仏全本。
(385) 因重病→「困重病」仏全本、長福寺本。〔参考〕「因重病」（『続天台』密教1—一四五頁上）。
因絶→「自絶」大正蔵、仏全本。〔参考〕「困絶」『義釈』（『続天台』密教1—一四五頁上）。
(386) 与→「與」大正蔵、仏全本、長福寺本。
皃→「貌」大正蔵、仏全本。〔参考〕「貌」『義釈』（『続天台』密教1—一四五頁上）。
検挍→〔参考〕「檢初（傍書「初イ校」）」『義釈』（『続天台』密教1—一四五頁上）。
來→「来」長福寺本。
為→「爲」大正蔵、仏全本。
(387) 尓→「爾」大正蔵、仏全本。
(388) 欭→〔参考〕「焔」『義釈』（『続天台』密教1—一四五頁下）。
慇懃→「殷懃」長福寺本。〔参考〕「殷勤（傍書「殷勤イホ〈ヘ慇懃」）」『義釈』（『続天台』密教1—一四五頁下）。
(389) 皈→「歸」大正蔵、長福寺本。「律」仏全本。〔参考〕「歸」『義釈』（『続天台』密教1—一四五頁下）。
此→「比」長福寺本。〔参考〕「比」『義釈』（『続天台』密教1—一四五頁下）。
(390) 蕪→「蘇」大正蔵、仏全本。
繫→「繋」大正蔵、仏全本。
秘密品云、閻摩但荼印、常處風輪中→『大日経』第五・秘密漫荼羅品第十一（『大正蔵』18—三五a）。
(391) 密→「蜜」長福寺本。
釈云、南方閻摩～中畫荼印若印等此一角向身一角向外也或隨便安置→〔参考〕『義釈』巻第十二・秘密漫荼羅品第十一之餘（『続天台』密教1—五四一頁上）。
釈→「釋」大正蔵、仏全本、長福寺本。
畫荼印→【書き込み】「畫（傍書別筆「但歟」）荼印」。「畫但荼印」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(392) 随彼→「隨彼」大正蔵、仏全本。〔参考〕「隨隱（傍書「隱イ㆓ホ〈ヘ彼」）」『義釈』（『続天台』密教1—五四一頁上）。
蔵品釈云置焔摩明王～威勢最大也→〔参考〕『義釈』巻第七・普通真言蔵品第四（『続天台』密教1—三〇一頁上）。
(393) 蔵→「藏」大正蔵、仏全本。
釈→「釋」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(394) 従→「從」大正蔵、仏全本。
(395) 无→「無」大正蔵、仏全本。
経→「經」大正蔵、仏全本。
无→「無」大正蔵、仏全本。
赤黒色→「亦黒色」仏全本。

(396) 頭髪髻→「頭髪」仏全本。
(397) 垂臥白水牛→「乗臥白水牛」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(398) 其中→「其牛」大正蔵、仏全本。
毯座→「毾座」仏全本。
正向→「（ナシ）」仏全本。
垂青水牛→「乗青水牛」大正蔵、仏全本、長福寺本。
有山圖→「有」仏全本。
(399) 絡結角根、同或圖→「（ナシ）」仏全本。
(400) 号→「號」大正蔵、仏全本。
(401) 𑖦→「𑖦（𑖦本）」仏全本。
軼→「耽」大正蔵。
如々不可得故→「（ナシ）」仏全本。
(402) (403) 具縁品云并黒夜→『大日経』巻第一・入漫荼羅具縁真言品第二之一（『大正蔵』18―八a）。
(404) 釈云左邊畫黒晴后、以幢為印→『義釈』巻第十二・秘密漫荼羅品第十一之餘（『続天台』密教1―五四一頁下）。
釈云東邊作黒夜神→『義釈』巻第四・入漫荼羅具縁真言品第二之二（『続天台』密教1―一四五頁下）。
釈→「釋」大正蔵、仏全本、長福寺本。
秘密品云黒夜計都印→『大日経』巻第五・秘密漫荼羅品第十一（『大正蔵』18―三五a）。
(405) 所傳圖在質咀羅以笈多右→『義釈』巻第四・阿闍梨所伝漫荼羅図位（『続天台』密教1―一五六頁）。
蔵品云黒夜神、是焰摩侍后～不思議解脱故→『義釈』巻第七・普通真言蔵品第四（『続天台』密教1―三〇二頁上）。
(406) 蔵品云→「藏品釋云」大正蔵、仏全本、「蔵品釋云」長福寺本。
黒夜神→〔参考〕「黒夜神眞言」『義釈』（『続天台』密教1―三〇二頁上）。
囉怛囉哩曳→「羅怛哩曳」大正蔵、仏全本、「囉怛哩曳」長福寺本。〔参照〕「(イ)囉）怛哩曳」『義釈』（『続天台』密教1―三〇二頁上）。
(407) 為真→「爲眞」大正蔵、仏全本。
晦→「晦（割註「考晦一作暗」）」仏全本。〔参照〕「晦」『義釈』（『続天台』密教1―三〇二頁上）。
真→「（ナシ）」大正蔵、仏全本、長福寺本。
霊→「靈」大正蔵、仏全本。
諸生→「諸主」長福寺本。〔参照〕「諸生」『義釈』（『続天台』密教1―三〇二頁上）。
(408) 悩→「惱」大正蔵、仏全本。
(409) 理→「理（傍書「哩原本」）」仏全本。
属→「屬」大正蔵、仏全本。
不令→「不命」長福寺本。〔参照〕「不令」『義釈』（『続天台』密教1―三〇二頁上）。
悩→「惱」大正蔵、仏全本。
无→「無」大正蔵。
(410) 怖畏→「怖畏處」大正蔵、仏全本。〔参照〕「怖畏」『義釈』（『続天台』密教1―三〇二頁上）。
不→「不（傍書「不ク无」）」仏全本。〔参照〕「不」『義釈』（『続天台』密教1―三〇二頁上）。
悩→「惱」大正蔵、仏全本。
(411) 全黒夜→「今黒夜」大正蔵、仏全本、長福寺本。〔参照〕「今」『義釈』（『続天台』密教1―三〇二頁上）。
(412) 真→「眞」大正蔵、仏全本。
(413) 无→「無」大正蔵、仏全本。
(414) (415) 持髑髏→「持髏髑」長福寺本。
(416) 摩→「魔」大正蔵、仏全本、長福寺本。
无→「無」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(417) 縵→「縵」大正蔵、仏全本。
(418) 号→「號」大正蔵、仏全本。
軼→「耽」大正蔵。
(419) 如々不可得故→「（ナシ）」仏全本。
(420) 経釈→「經釋」大正蔵、仏全本、「経釋」長福寺本。
三蔵儀軌云判官諸鬼属→〔参考〕善無畏訳『大毘盧遮那経広大儀軌』巻中（『大正蔵』18―一〇四a）。輸婆迦羅訳『攝大毘盧遮那成仏神変加持経入蓮華胎蔵海会悲生曼荼攞広大念誦儀軌供養方便会』第二（『大正蔵』18―七七c）。
蔵→「藏」大正蔵、仏全本。
属→「屬」大正蔵、仏全本。
玄法儀軌云奉教官→『大毘盧遮那成仏神変加持経蓮華胎蔵悲生曼荼羅広大成就儀軌供養方便会』巻第二（『大正蔵』18―一二一b）。
(421) 玄法儀軌→「玄法寺（傍書「无ク」）」仏全本。
所傳圖云質咀羅笈多訊獄者在閻摩右→『義釈』巻第四・阿闍梨所伝漫荼羅図位（『続天台』密教1―一五六頁）。
(422) 垂→「乘」長福寺本。
膝開→「膝前開」大正蔵、仏全本。
(423) 布→〔補足〕布「シク」『類聚名義抄』法中一一〇。
點→〔補足〕點「書々、カク」『類聚名義抄』佛下末五六。
把→「抱」大正蔵、仏全本。
(424) (425) 或圖當腰側、向内持物→「（ナシ）」仏全本。
一鬼→「二鬼」仏全本。
(426) 唯→「（ナシ）」仏全本。
犢→〔補足〕「コウシ、ウシノコ」『類聚名義抄』佛下末二。
赤縵袴→「（ナシ）」仏全本。
(427) 是為好→「（ナシ）」仏全本。
作拳→「（ナシ）」仏全本。
(428) 下視文書→「（ナシ）」仏全本。
並→「竝」大正蔵、仏全本。
硯→「視」大正蔵、仏全本。
(429) (430) 号→「號」大正蔵、仏全本。
(431) (432) 具縁品云死后等囲繞→『大日経』巻第一・入漫荼羅具縁真言品第二之一（『大正蔵』18―八a）。
釈云閻摩之西作閻摩后及死后、亦是閻摩后也→『義釈』巻第四・入漫荼羅具縁真言品第二之二（『続天台』密教1―一四五

頁下）。

釈云↓「釋云」大正蔵、仏全本、「釋曰」長福寺本。

閻摩↓〔参考〕「焔摩（傍書「焔摩㋑閻魔㋭〈閻摩」）」『義釈』（『続天台』密教1―一四五頁下）。

閻摩之西↓「閻魔之西」長福寺本。〔参考〕「焔摩（傍書「焔摩㋑閻魔㋭〈閻摩」）之西」『義釈』（『続天台』密教1―一四五頁下）。

(433) 閻摩后↓〔参考〕「焔摩（傍書「焔摩㋑閻魔㋭〈閻摩」）后」『義釈』（『続天台』密教1―一四五頁下）。

秘密品云没栗底鈴印↓『大日経』巻第五・秘密漫荼羅品第十一（『大正蔵』18―三五a）。

(434) 釈云王右邊畫死后、以鈴為印、若畫形即持之↓『義釈』巻第十二・秘密漫荼羅品第十一之餘（『続天台』密教1―五四一頁上～下）。

釈云↓「釋云」大正蔵、仏全本、長福寺本。

為↓「爲」大正蔵、仏全本。

若畫形↓〔参考〕「若畫身（傍書「身㋑㋺㋭〈形」）」『義釈』（『続天台』密教1―五四一頁下）

諸儀云焔摩后鐸↓〔参考〕「焔摩后妃鐸」輸婆迦羅訳『攝大毘盧遮那成仏神変加持経入蓮華胎蔵海会悲生曼荼攞広大念誦儀軌供養方便会』巻第二（『大正蔵』18―七七c）。

所傳圖閻摩没嘌底后在閻魔后之左↓『義釈』巻第四・阿闍梨所伝漫荼羅図位（『続天台』密教1―一五六頁）。

諸儀云↓【上縁貼紙】「諸儀他本ニ諸儀軌」、「諸儀軌云」大正蔵、仏全本、長福寺本。

(435) 閻魔后↓「閻摩后」大正蔵、仏全本、長福寺本。

(436) 左手↓「在手」大正蔵、仏全本。

(437) 接↓「持」大正蔵、仏全本、長福寺本。〔補足〕接「トル」『類聚名義抄』佛下本七八。

(438) 有葉↓「（ナシ）」仏全本。

(439) 蓮花↓「蓮華」大正蔵、仏全本。

合蓮↓「含（傍書「ク合」蓮）」仏全本。

(440) 茎↓「莖」大正蔵、仏全本、長福寺本。

面向左手↓「面向左方」大正蔵、仏全本、長福寺本。

(441) 无↓「無」大正蔵、長福寺本。

唯有縵袴↓「唯有○（左傍書「此間疑有脱字」）」仏全本。

(442) 或圖皆有之↓「（ナシ）」仏全本。

(443) ※以下、477行目まで建武本は本文を脱落させるため、長福寺本をもって当該箇所の本文を補う。

三蔵儀軌所謂妃者乎、彼軌云死后妃囲繞↓〔参考〕善無畏訳『大毘盧遮那経広大儀軌』巻中（『大正蔵』18―一〇四aの脚注2「震雷玄雲色七母并黒夜死后妃囲繞」）。輸婆迦羅訳『攝大毘盧遮那成仏神変加持経入蓮華胎蔵海会悲生曼荼攞広大念誦儀軌供養方便会』巻第二（『大正蔵』18―七七c）。〔補足〕法全撰『大毘盧遮那成佛神変加持経蓮華胎藏悲生曼荼羅広大成就儀軌供養方便会（玄法寺軌）』巻第二（『大正蔵』18―一二一c）、法全撰『大毘盧遮那成佛神変加持経蓮華胎藏菩提幢標幟普通眞言藏広大成就瑜伽（青龍寺軌）』巻下（『大正蔵』18―一六〇b）。

長福寺本「蔵」↓「藏」大正蔵、仏全本。

長福寺本「欠」↓「缺」大正蔵。

(444) 故云五大院此次別立焔魔妃一鬼在中↓〔参考〕安然記『胎蔵界大法対受記』（『大正蔵』75―八五b、一〇九c）。

長福寺本「焔」↓「閻」大正蔵、仏全本。

長福寺本「一鬼在中」↓「（ナシ）」大正蔵。

(445) 長福寺本「号」↓「號」大正蔵、仏全本。

(446) 長福寺本「」↓「」仏全本。

(447) 所傳圖有毘舍支十眷属↓『義釈』巻第四・阿闍梨所伝漫荼羅図位（『続天台』密教1―一五五頁）。

印品説諸毘舍支印言↓『大日経』巻第四・密印品第九（『大正蔵』18―二九c）。

長福寺本「所傳圖有毘舍支十眷属、印品説諸毘舍支印」↓「（ナシ）」仏全本。

長福寺本「属」↓「屬」大正蔵、仏全本。

(448) 長福寺本「言、私云軌毘舍支真言在北方」↓「（ナシ）」仏全本。

長福寺本「真」↓「眞」大正蔵、仏全本。

長福寺本「在北方」↓「在北方一鬼（在中）」大正蔵。

長福寺本「著犢」↓「（ナシ）」仏全本。〔補足〕犢「音讀、ウシノコ」『類聚名義抄』佛下末二。

(449) 長福寺本「鼻褌」↓「（ナシ）」仏全本。

長福寺本「向内」↓「（ナシ）」仏全本。

長福寺本「或圖」↓「（ナシ）」仏全本。

(450) 長福寺本「右含蓮」↓「（ナシ）」仏全本。

長福寺本「俯」↓「府面」大正蔵、仏全本。

(451) (452) 長福寺本「無」↓「无」仏全本。

(453) 長福寺本「向右」↓「向左」仏全本。

長福寺本「拳」↓「（ナシ）」仏全本。

長福寺本「當」↓「（ナシ）」仏全本。

(454) 長福寺本「心」↓「（ナシ）」仏全本。

長福寺本「齊」↓「臍」大正蔵、仏全本。

長福寺本「身向」↓「向」仏全本。

長福寺本「有」↓「（ナシ）」大正蔵、仏全本。

(455) 長福寺本「四鬼一鬼（在内）」↓「（ナシ）」大正蔵、仏全本。

(456) (457) 長福寺本「号」↓「號」大正蔵、仏全本。

長福寺本「」↓「」大正蔵、「」仏全本。

(458) 長福寺本「同上」↓「（ナシ）」大正蔵、仏全本。

(459) 所傳圖有毘盧遮十眷属↓『義釈』巻第四・阿闍梨所伝漫荼羅図位（『続天台』密教1―一五五頁）。

長福寺本「毘盧遮十眷属」↓（参考）「毘盧遮那（傍註「那㊀㋭〈ナシ」左傍註「毘盧遮那頭舎遮」）十眷属」（『続天台』密教1―一五五頁）

(460) 長福寺本「十」↓「十（割註「考十一作」）」仏全本。

長福寺本「属」↓「屬」大正蔵、仏全本。

長福寺本「誤」↓「悞」仏全本。

蔵品説諸毘舍遮真言↓『大日経』巻第三・普通真言蔵品第四（『大正蔵』18―一七a）。

(461) 長福寺本「藏」↓「蔵」大正蔵、仏全本。

長福寺本「眞」↓「真」大正蔵、仏全本。

釋云毘舍遮是～以為名↓『義釈』巻第七・普通真言蔵品第七（『続天台』密教1―三四六頁上）。

長福寺本「為」↓「爲」大正蔵、仏全本。

(462) 長福寺本「惱」→「惱」大正蔵、仏全本。
逼切→〔補足〕逼「シフ、セハシ」『類聚名義抄』佛上五八。
長福寺本「為」→「爲」大正蔵、仏全本。
印品又説諸毘舎遮印明→『大日経』巻第四・密印品第九（『大正蔵』18―二九ｃ）。
三蔵軌列北方多聞眷属之中、彼文云門東毘舎遮、即名毘舎支云々、私云其真言在彼列之→〔参考〕善無畏訳『大毘盧遮那経広大儀軌』巻中（『大正蔵』18―一〇五ｃ）。輸婆迦羅訳『攝大毘盧遮成仏神変加持経入蓮華胎蔵海会悲生曼荼攞広大念誦儀軌供養方便会』第二（『大正蔵』18―一〇五ｃ）。
(463) 長福寺本「蔵」→「藏」大正蔵、仏全本。
(464) 長福寺本「属」→「屬」大正蔵、仏全本。
(465) 長福寺本「真」→「眞」大正蔵、仏全本。
長福寺本「青髪向上」→「有四鬼、一鬼在内、青髪向上」大正蔵。
※仏全本は以下、475行目の「長跪」まで字句すべて「（ナシ）」。
(466)
(467)
(468) 長福寺本「在中東」→「東」大正蔵。
(469) 長福寺本「肘立」→「立肘」大正蔵。
(470) 長福寺本「開張」→「張」大正蔵。
(471)
(472) 長福寺本「在中西」→「西」大正蔵。
(473)
(474)
(475)
(476) 長福寺本「齧」→「嚙」大正蔵。
(477)
(478) 下有→「有」大正蔵、長福寺本。
(479) 疏云凡閻王部類、風輪中也、可勘審之→「凡閻王部類皆在風輪中也」『大日経疏』（『大正蔵』39―七四四ｂ）。
風輪中也→「皆在風輪中也」仏全本、長福寺本。〔参考〕「皆在風輪中也」『大日経疏』（『大正蔵』39―七四四ｂ）。
(480) 在内→「在外」仏全本。
向右→「向左」大正蔵、仏全本。
持、左掌持杯→「左掌持杯」大正蔵、仏全本。
在外→「在内」仏全本。
(481) 或圖竪左膝屈左脚→「（ナシ）」仏全本。
横立右足上→「（ナシ）」仏全本、「横立左足上右」長福寺本。
(482) 跪→「長跪」仏全本、長福寺本。
在内→「在外」仏全本。
(483) 向右→「向左」仏全本。
直垂竪→「直竪」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(484)
(485) 脱梵号→「（ナシ）」大正蔵、「脱梵號」仏全本。
(486) 儀軌坐位圖無後鬼衆→『秘蔵記』において鬼衆を指すものと思われる「太山府君部落集」以外に他には鬼衆の類が存在しないこと（『大正蔵』図像1―一四ｂ）を指すか。
(487)
(488) 号→「號」仏全本。
(489) 𑖀→「𑖀」大正蔵、仏全本、長福寺本。
因不可得故→「（ナシ）」仏全本。
圖→「圖同上」長福寺本。
(490) 秘密品云烏鷲及婆栖野干等囲繞→『大日経』巻第五・秘密漫荼羅品第十一（『大正蔵』18―三五ｂ）。
囲→「圍」大正蔵、仏全本、長福寺本。
釋云七母等眷属謂烏鷲狐及栖鳥似鵄鵂小黄土色、觜亦黄是鵂梟也、此鳥有秘身法也→『義釈』巻第十二・秘密漫荼羅品第十一之餘（『続天台』密教1―五四一頁下）。
(491) 属→「屬」大正蔵、仏全本。
鵂鶹→〔補足〕鵂「トヒ、ハシタカ、フクロフ」『類聚名義抄』僧中一二七、鵂「音阿、カラス」『同』僧中一一八。
鸇→〔補足〕鸇「音旃セン、ハシタカ」『類聚名義抄』僧中一一六。
(492) 並→「竝」大正蔵、仏全本。
囲→「圍」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(493) 真→「眞」大正蔵、仏全本。
(494) 漫→「曼」大正蔵。
為→「爲」大正蔵、仏全本。
(495)
(496) 蔵品釋云又拳枳捉真言此是薬叉趣～故説此真言→『義釈』巻第七・普通真言蔵品第四（『続天台』密教1―三四四～三四五頁）。
蔵→「藏」大正蔵、仏全本。
真→「眞」大正蔵、仏全本。
属→「屬」大正蔵、仏全本。
(497) 迦→「訶迦」大正蔵、仏全本、長福寺本。
為→「爲」大正蔵、仏全本。
心→〔参考〕「心キモ」『義釈』（『続天台』密教1―三四四頁）。
(498) 花→「華」大正蔵、仏全本。
(499) 用→「周」大正蔵、仏全本、長福寺本。〔参考〕「周」『義釈』（『続天台』密教1―三四四頁）。
西域→「四（傍書「西原本」）域」仏全本。
(500) 随→「隨」大正蔵、仏全本。
為→「爲」大正蔵、仏全本。
无故→「無故」大正蔵、「故」仏全本。
令→「命」大正蔵、仏全本、長福寺本。〔参考〕「命㋑令」（『続天台』密教1―三四五頁）。
(501) 之→「方」大正蔵。〔参考〕「之」（『続天台』密教1―三四五頁）。
潜→「濳」大正蔵、仏全本。
(502)
(503)
(504)
(505) 今→「（ナシ）」仏全本。
(506) 為→「爲」大正蔵、仏全本。
(507) 飯→「歸」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(508) 済→「濟」大正蔵、仏全本、長福寺本。
聽→「聴」長福寺本。
来→「來」大正蔵、仏全本。
(509) 争→「爭」大正蔵、仏全本。
(510) 聽→「聴」長福寺本。
為→「爲」大正蔵、仏全本。
伏→「彼」仏全本、長福寺本。〔参考〕「彼」（『続天台』密教1―三四五頁）。
恵→「惠」大正蔵、「慧」仏全本。〔参考〕「慧」（『続天台』密教1―三四五頁）。

真→「眞」大正蔵、仏全本。
所傳圖荼迦荼吉尼在伊舍那方→『義釈』巻第四・阿闍梨所伝漫荼羅図位（『続天台』密教1―一五五頁）。
禅門云現圖亦在北方→出典未詳。
禅→「禪」大正蔵、仏全本。
㘝→〔補足〕㘝「フス」『類聚名義抄』佛上六三。
或圖→「（ナシ）」仏全本。
申指執、面→「（ナシ）」仏全本。
單→「（ナシ）」仏全本。〔補足〕單「コトコトク」『類聚名義抄』佛中三二。
環→「〇（傍書「有落字乎」）」仏全本。
※この一行は建武本、大正蔵本ともに欠いているため、仏全本と長福寺本をもって補った。
指上少側左→「（ナシ）」仏全本。
右者→「左者」大正蔵、仏全本。
開肘→「竪開肘掌」仏全本。
掌中→「（ナシ）」仏全本。
或→「（ナシ）」仏全本。
圖同、唯當口、→「（ナシ）」仏全本。
刃未詳→「刃未詳【図】」長福寺本。
面向右方視在内→「（ナシ）」仏全本。
省→「者」大正蔵、長福寺本、「（ナシ）」仏全本。
左脚押右→「（ナシ）」仏全本。
在西→「左」仏全本。
偃臥→〔補足〕偃「フス」、偃臥「フス」『類聚名義抄』佛上二二。
閇→「閉」仏全本。
頭内足外→「（ナシ）」仏全本。
秘密品云閻摩但荼印～野干等囲繞→『大日経』巻第五・秘密漫荼羅品第十一（『大正蔵』18―三五a～b）。
勞→「澇」長福寺本。〔参考〕「澇」『大日経』（『大正蔵』18―三五a）。
花→「華」大正蔵、仏全本。
㘑→「焔」大正蔵、仏全本。
漫→「曼」大正蔵、仏全本。
圍→「周」大正蔵、仏全本。
釈云南方閻摩王、當作風壇々～故耳皆悉以為荘厳→『義釈』巻第十二・秘密漫荼羅品第十一之餘（『続天台』密教1―五四一頁上～下）。
釈→「釋」大正蔵、仏全本、長福寺本。
□→「若」大正蔵、仏全本、長福寺本。
□印等此壇一角向身一角向外也→「若印等此壇一角向身一角向外也」大正蔵。
為→「爲」大正蔵、仏全本。
或随彼便安置→「或隨彼便安置」大正蔵。
随→「隨」大正蔵、仏全本。
為→「爲」大正蔵、仏全本。
梵云計都亦旗也→「梵云計都亦旗也」大正蔵。
𑖀→「𑖀」大正蔵、仏全本。
同用→「同（割註「考」同下一本有用字）」仏全本。
藥→「藥」大正蔵、仏全本。
離→「〇（左傍書「羅」、割註「考」一本作離）」仏全本。
以持→「持」大正蔵、長福寺本。
持之謂屈水地指於掌中散舒餘三指、如笑手状→※脱文につき後筆か、
持之→「之」大正蔵、仏全本、長福寺本。
状→「状、以持」大正蔵、仏全本、長福寺本。
属→「屬」大正蔵、仏全本。
𑖨→「𑖨（𑖨本）」仏全本。
真→「眞」大正蔵、仏全本。
令→〔参考〕「今」『義釈』（『続天台』密教1―五四一頁下）。
漫→「曼」大正蔵。
為→「爲」大正蔵、仏全本。
属→「屬」大正蔵、仏全本。
【左上隅貼紙】「輪羅印輪羅印也輪者輪訛也」
漫→「曼」大正蔵。
輪→「輮」大正蔵、仏全本、長福寺本。
自在女、倶吠→「自在女、毘紐女、倶摩利、鑠底印、倶吠」長福寺本。
為→「爲」大正蔵、仏全本。
具縁品云左方閻摩王云々、七母并黒夜死后等圍繞→『大日経』巻第一・入漫荼羅具縁真言品第二之一（『大正蔵』18―八a）。
釋云次於左方東大日之南作㘑魔法王云々～其形悉皆黒色→『義釈』巻第四・入漫荼羅具縁真言品第二之二（『続天台』密教1―一四五頁上～下）。
㘑魔法王→「焔魔法王」大正蔵、仏全本、「㘑摩法王」長福寺本。
閻魔之西→「閻摩之西」長福寺本。
摩→「魔」大正蔵、仏全本、長福寺本。
里→「哩」大正蔵、仏全本。
釋→「譯」大正蔵、「譯（傍書原本「釋」）」仏全本。
私云此品有十一尊、閻魔一七母八黒夜九焔摩后十死后十一
閻魔→「閻摩」長福寺本。
藏品説閻摩死王、黒夜神、七母等、諸荼吉尼、五ケ真言→『大日経』巻第二・普通真言藏品第四（『大正蔵』18―一五a）。
藏→「藏」大正蔵、仏全本。
閻摩→「閻魔」大正蔵、仏全本。
死王→「死王」仏全本、長福寺本。
五ケ→「五箇」大正蔵、仏全本。
印品説㘑魔印也、焔摩后二鐸印、暗夜案縁印也三～八ケ印相→『大日経』巻第四・密印品第九（『大正蔵』18―一九b）。
㘑魔→「㘑摩」長福寺本。
焔摩后→「㘑摩后」大正蔵、仏全本。
末→「未」大正蔵、仏全本、長福寺本。
八ケ→「八箇」大正蔵、仏全本。
又説諸毘舎遮、諸毘舎支、諸荼吉尼、三ケ印真言→『大日経』巻第四・密印品第九（『大正蔵』18―一九b、三〇a）。
三ケ→「三箇」大正蔵、仏全本。
真→「眞」大正蔵、仏全本。
真→「眞」大正蔵、仏全本。

(560) 号→「號」大正蔵、仏全本。
𠺕→「𠺕（𠺕本）」仏全本。
(561) 駝→「駝」大正蔵。
如々不可得故→「（ナシ）」仏全本。
(562) 所傳圖悉地持明仙、悉地持明仙妃、在風天護方神左→『義釈』巻第四・阿闍梨所傳漫荼羅圖位（『続天台』密教1―一五九頁）。
(563) 釈云悉地持明者、皆是専依呪術得悉地人云々→『義釈』巻第四・入漫荼羅具縁真言品第二之二（『続天台』密教1―一六一頁下）。
(564) 釈→「釋」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(565) 被髪→「被髻」大正蔵、仏全本。
(566) 或圖屈臂仰掌、屈名中小頭、中間夾嚢、繫→「（ナシ）」仏全本、「或圖屈臂仰掌、屈中名」長福寺本。
夾嚢、繫→註569「夾嚢口、繫」長福寺本。
(567) 肘上、従上出外其嚢、非皮→「（ナシ）」仏全本。
金環→「金環玉玉」仏全本。
(568) 或圖无→「或圖無」大正蔵、「（ナシ）」仏全本、長福寺本。
或圖竪右脚、其左脚著地返屈足、一仙在外→「一仙在外」仏全本。「一仙外在、或圖竪右脚、其左脚著地返屈足」長福寺本。
屈→「屬」大正蔵。
(569) 赤肉色→「赤色」仏全本。
縵袴、下著豹皮褌→「（ナシ）」仏全本。「縵袴、下著豹皮褌、小頭、中間夾嚢口、繫肘上、従上出外其嚢非皮」長福寺本。
右開肘持物→「右持物」仏全本。
可勘赤→「可勘」大正蔵、仏全本、「可勘（朱書「赤」）」長福寺本。
(570) 或圖杖上半月上星→「（ナシ）」仏全本。
(571) 一仙→「一開肘仙」長福寺本。
(572) 屈臂竪→「竪屈臂」仏全本。
作拳於→「作拳入於」仏全本、「作拳叉於」長福寺本。
或圖覆→「（ナシ）」仏全本。
(573) 掌、指太垂下→「（ナシ）」仏全本、「掌、大指垂下」長福寺本。
膝竪坐→「左膝竪坐」仏全本、長福寺本。
无→「無」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(574) 一仙在左外→「持物、一仙在左外」仏全本。
(575) 肩下持→「肩又持」仏全本。
脚著→「著」仏全本。
或圖→「（ナシ）」仏全本。
(576) 左押右交、无環→「（ナシ）」仏全本。
面→「（ナシ）」仏全本。
无→「無」大正蔵、長福寺本。
(577) 右拳叉腰→「左拳叉腰」大正蔵、仏全本、長福寺本。
脩→「修」大正蔵、長福寺本。
(578) 号→「號」大正蔵、仏全本。
(579) 𠺕→「𠺕」仏全本。
摩→「麼」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(580) 三蔵儀軌云、婆稚阿修羅女→〔参考〕「阿闍梨密意三院三婆稚阿修羅女及衆並口授」輪婆迦羅訳『摂大毘盧遮那成仏神変加持経入蓮華胎蔵海会悲生曼荼擺広大念誦儀軌供養方便会』（『大正蔵』18―八一aの脚註2）。
(581) 蔵→「藏」大正蔵、仏全本。
脩→「修」大正蔵、仏全本、長福寺本。
所傳圖阿修羅并眷属在涅哩底護方神左→『義釈』巻第四・阿闍梨所傳漫荼羅圖位（『続天台』密教1―一五九頁）。
(582) 属→「屬」大正蔵、仏全本。
帯出従→「（ナシ）」仏全本。
従→「從」大正蔵。
(583) 右腋繫肘上自外垂下、左蔽使者不見→「（ナシ）」仏全本。
繫→「繋」大正蔵。
蔽→「（当該箇所余白）」長福寺本。〔補足〕「オホフ、カクス」『類聚名義抄』僧上四六。
端→「（ナシ）」仏全本。
(584) 左脚押右而坐→「（ナシ）」仏全本。
(585) 脚著甲赤草履→「（ナシ）」仏全本。
面向右方→「向右」仏全本。
或圖左掌叉腰→「（ナシ）」仏全本。
被襵褶袈裟无瓔、或圖无襵著瓔→「（ナシ）」仏全本。
无瓔→「無瓔珞」大正蔵、「無瓔」長福寺本。
(586) 无襵→「無襵」大正蔵、長福寺本。
(587) 屈臂向内→「（ナシ）」仏全本。
上金半月→「（ナシ）」仏全本。
(588) 竪拳執刃未詳→「刃未詳」仏全本。
(589) 上金半月右→「上金半月」大正蔵、「半月」仏全本。
面向右方→「向右方」仏全本。
(590) 脩→「修」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(591) 号→「號」大正蔵、仏全本。
(592) 二→「（ナシ）」仏全本、長福寺本。
本不生故→「（ナシ）」仏全本。
(593) 脩→「修」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(594) 端→「（ナシ）」仏全本。
(595) 草→「革（傍書「ク草」）」仏全本。
(596) 宝→「寶」大正蔵、仏全本、「寳」長福寺本。
(597) 有二使者→「有二使者」長福寺本。
(598) 或圖少仰掌指頭持物未詳→「（ナシ）」仏全本。
指端→「（ナシ）」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(599) 右、掌→「（ナシ）」大正蔵、仏全本、長福寺本。
或圖大指少屈→「（ナシ）」仏全本。
(600) 斉→「臍」大正蔵、仏全本、「齊」長福寺本。
(601) 或圖→「（ナシ）」仏全本。
(602) 号→「號」大正蔵、仏全本。
(603) 二→「（ナシ）」仏全本、長福寺本。
(604) 𠺕初→「誐初」大正蔵、仏全本。
一切→「（ナシ）」仏全本。
(605) 楽→「樂」大正蔵、仏全本、長福寺本。
(606) 所傳圖在西北方在風天護方神右→『義釈』巻第四・阿闍梨所伝漫荼羅図位（『続天台』密教1―一五四頁）。
脩→「修」大正蔵、長福寺本。

(607) (608) (609) (610) 号→「號」大正蔵、仏全本。

→「（一本）」仏全本。

二→「（ナシ）」仏全本、長福寺本。

(611) 楽→「樂」大正蔵、仏全本、長福寺本。

(612) 脩→「修」大正蔵、長福寺本。

无→「無」大正蔵、仏全本、長福寺本。

或圖有之→「（ナシ）」仏全本、長福寺本。

(613) (614) (615) 左脚右交坐→「左足押右交坐」

(616) 号→「號」大正蔵、仏全本。

→「」大正蔵、仏全本。

(617) 楽→「樂」大正蔵、仏全本、長福寺本。

(618) 所傳圖鳩盤荼衆眷属箕耳馬耳羊耳等在伊舎那之右→『義釈』巻第四・阿闍梨所伝漫荼羅図位（『続天台』密教1―一五四頁）。

(619) 属→「屬」大正蔵、仏全本。

(620) (621) 号→「號」大正蔵、仏全本。

(622) →「」大正蔵、「」仏全本。

二→「（ナシ）」仏全本、長福寺本。

(623) 離作業故→「（ナシ）」仏全本。

(624) 或圖白色→「或圖白色」仏全本。

(625) 无→「無」大正蔵、仏全本。

面少向左、右足向右、或圖→「（ナシ）」仏全本。

(626) 左押右交坐→「（ナシ）」仏全本。

所傳圖南方有緊那羅、緊那羅妃、末羅弭、哩捺、燕捺利、嬌利、吠瑟拏味、嬌吠唎、遮悶拏→『義釈』巻第四・阿闍梨所伝漫荼羅図位（『続天台』密教1―一五七～一五八頁）。

(627) (628) 嬌唎→「嬌麼唎」大正蔵、仏全本。

(629) 无→「無」大正蔵、仏全本。

大般若優為憂字→「大般若優為憂字」大正蔵、仏全本、長福寺本。

般→【書き込み】「般（傍書「注カ」）」

(630) 為→「爲」大正蔵、仏全本。

大般若優為憂→「大般若憂為憂」大正蔵、仏全本、長福寺本。

般→【書き込み】「般（傍書「注カ」）」

為→「爲」大正蔵、仏全本。

(631) 弁→「辯」大正蔵、仏全本、「辦」長福寺本。

黒→「黒色」大正蔵、仏全本。

(632) 楼→「樓」大正蔵、仏全本。

(633) 悩→「惱」大正蔵、仏全本。

(634) 属→「屬」大正蔵、仏全本。

釈云南方苾陵吃嗹知～要令得勝故為此形→『義釈』巻第四・入漫荼羅具縁真言品第二之二（『続天台』密教1―一六二頁上）。

(635) 釈→「釋」大正蔵、仏全本、長福寺本。

(636) 為→「爲」大正蔵、仏全本。

(637) 脩→「修」大正蔵、仏全本、長福寺本。

(638) (639) 蔵→「藏」

八→「八（傍書「九」）」仏全本。

(640) 以下は長福寺本には「（ナシ）」。仏全本には代わって以下の奥書識語を伝える。

交合本云

文治五年酉秋八月廿五日誂他筆功了於小田原草庵閑居記之、

元禄九年丙子十月廿八日於池上成願寺以或本校正了、

元文四己未年夏五月八日對校功畢、範海五十二

爲法林妙入信女菩提也、

寛延元戊申九月中旬於洛陽太子堂大疏傳受砌一校了、

小比丘秀宣雖七生、用五

(641) (642) 乙亥→「亥乙」大正蔵。

(643)

『大日経義釈』秘密品の引用箇所に描かれた「印形」

	建武本	大正蔵本	仏全本	長福寺本
幢印				
輪羅印				
鍐底印				
輪印				
没薩印				
頂骨印				

	建武本	大正蔵本	仏全本	長福寺本
迦樓羅王				
迦樓羅女				
鳩盤荼				
鳩盤荼女				

『諸説不同記』最外院（巻第八後半 収載分）三摩耶形　比較（一覧）

	建武本	大正蔵本	仏全本	長福寺本
鬼衆女	本文ともに欠落			
鬼衆	本文ともに欠落			（無）
鬼衆	（無）	（無）	（無）	（無）
荼吉尼衆				（無）
成就仙衆	（無）	（無）	（無）	（無）
摩尼阿脩羅				
阿脩羅衆				

	建武本	大正蔵本	仏全本	長福寺本
難陀龍王				
烏波龍王				（無）
阿脩羅王衆	（無）	（無）		
塩摩羅王				
黒闇天女				
毘山府君				
死鬼衆				

建武本巻八下影印

※貼紙

※

（22ウ）　（23オ）　（23ウ）　（24オ）　（24ウ）　（25オ）　（25ウ）　（26オ）

※貼紙

東寺観智院金剛蔵本（建武二年写）『諸説不同記』巻第八（下）

解題・翻刻・校註・影印

※

（26ウ）

（27オ）

（27ウ）

（28オ）

（28ウ）

（29オ）

（29ウ）

（30オ）

※

※印紙

（32オ）

（34オ）

（31ウ）

（33ウ）

（31オ）

（33オ）

（30ウ）

（32ウ）

東寺観智院金剛蔵本（建武二年写）『諸説不同記』巻第八（下）

解題・翻刻・校註・影印

（34ウ）

（35オ）

（35ウ）

（36オ）

（36ウ）

（37オ）

（37ウ）

（38オ）

（長福寺本34オ）

（長福寺本33ウ）

（長福寺本33オ）

（裏表紙裏）

（裏表紙）

（長福寺本32ウ）

建武本28丁オ・ウ間の欠落箇所を長福寺本で補う

（38ウ）

巻第八（後半）引用典籍・口決類一覧

（算用数字は翻刻文の行番号を示す）

玄法儀軌 350、
玄法儀軌云 420、
五大院 444、
今按 443、
坐位図 486、
三蔵軌 462、
彼（三蔵軌）文云 463、
三蔵儀軌 443、
三蔵儀軌云 420、580、
彼（三蔵儀）軌云 443、
所伝図 363、405、435、447、459、510、562、580、606、618、626、
所伝図云 421、
図云 441、
禅門云 511、
大日経
　印品説 447、554、
　印品又説 462、
　又（印品）説 557、
　具縁品云 380、403、432、547、
　蔵品説 460、552、
　秘密品云 390、403、433、490、524、
（大日経）義釈
　（具縁品）釈云 382、403、432、547、563、634、
　蔵品釈云 364、391、496、
　蔵品（釈）云 405、
　（蔵品）釈云 460、
　（秘密品）釈云 390、404、434、490、529、
（大日経）疏
　疏（秘密品）云 479、
　私謂 636、
　私云 441、448、459、494、543、545、550、627、633、
　私案 478、

（長福寺本 34ウ）

（長福寺本 35オ）

（長福寺本 35ウ）

（長福寺本 36オ）